

江戸名所圖會

十四

JL 4
3605
14



門 4
3505
14

江戸名所圖會卷之五

玉衡之部目錄

湯島聖堂

徳園三社

妻戀心神社

根生院

中島辨財天

十月二日雨止忌の因

善眼大師

本以寺

番付社

淨光寺

圓満寺

湯島天満宮

三橋

東叡山寛永寺

大佛殿

楯ヶ峯

谷中瑞林寺

螢澤

七面大明神社

青雲寺

神田明神社

靈雲寺

湯島神社

池の端綿袋圓店

竹巻

天竺社

秋色福

感恩寺

日暮里

養福寺

観音堂

同祭禮の圖

藤洋院

不忍池

青蓮堂

雲水塔

文珠橋

学寮

兩山堂

南泉寺

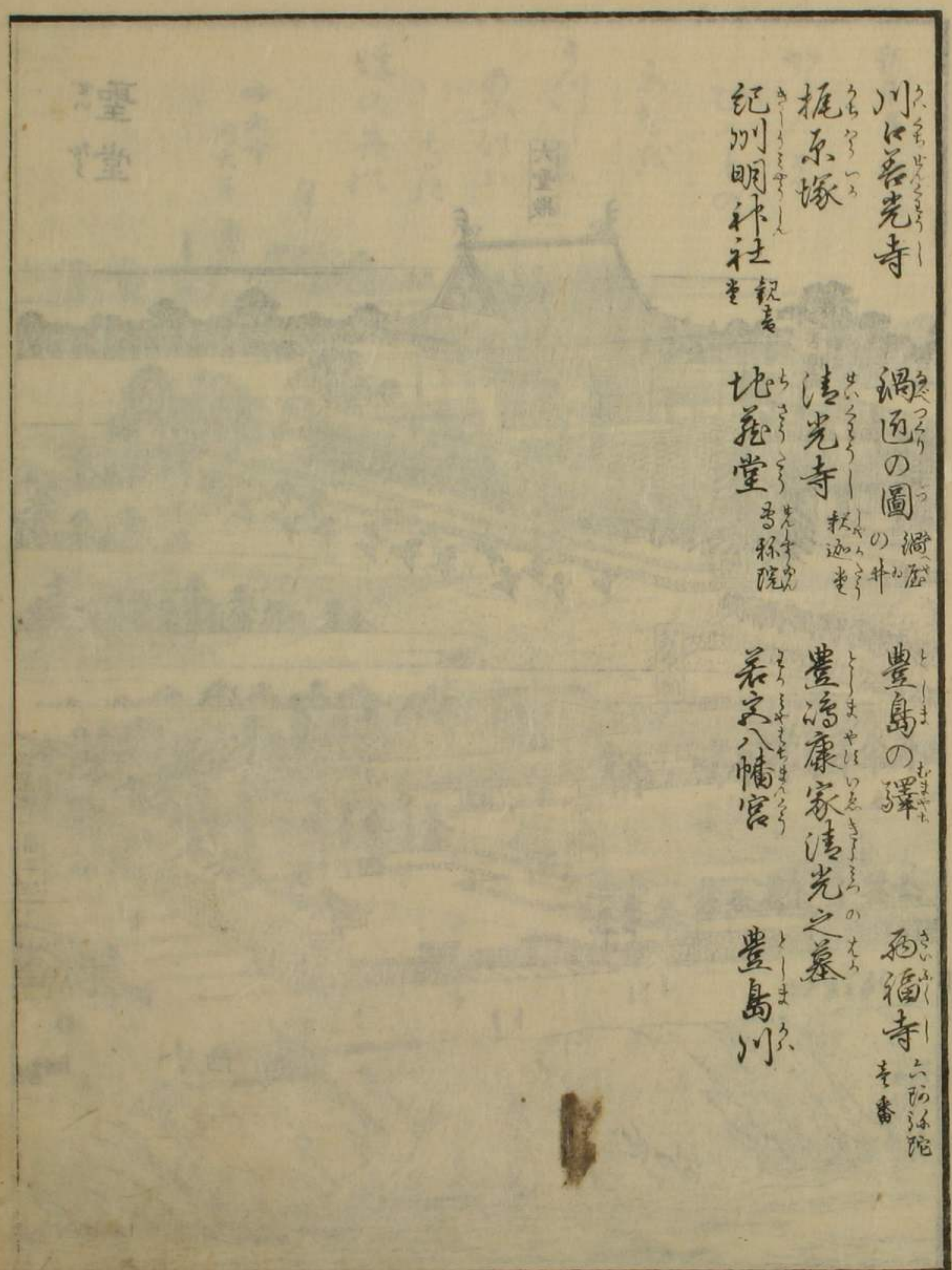
坂坊明神社

道灌山

志賀文庫

故三上茂吉氏文庫
三上茂吉

聖堂



川口普光寺
梶原塚
紀州明神社

過函の圖
清光寺
地蔵堂

豊島の驛
豊清康家清光之墓
若文八幡宮

若文八幡宮
豊島川
若文八幡宮

根津権現社

目赤不動堂

六月朔日富士宿の巻
圓勝寺

白鬚明神社

王子権現社

七月祭祀の巻
全輪寺

全別寺

根津権現舊地

駒込吉祥寺

田畑子樂寺
深井西福寺

昌林寺

平塚城跡
音吉川

王子権現社
十八講の巻
源不動堂

三法法蓮寺

駒込大観音
神明宮

平塚明神社

同合戦の巻

同新酒亭の巻

装束留衣裳櫃

石井井川
泉流跡
赤羽山八幡宮

妙林寺

丸山浄心寺
富士法回宮

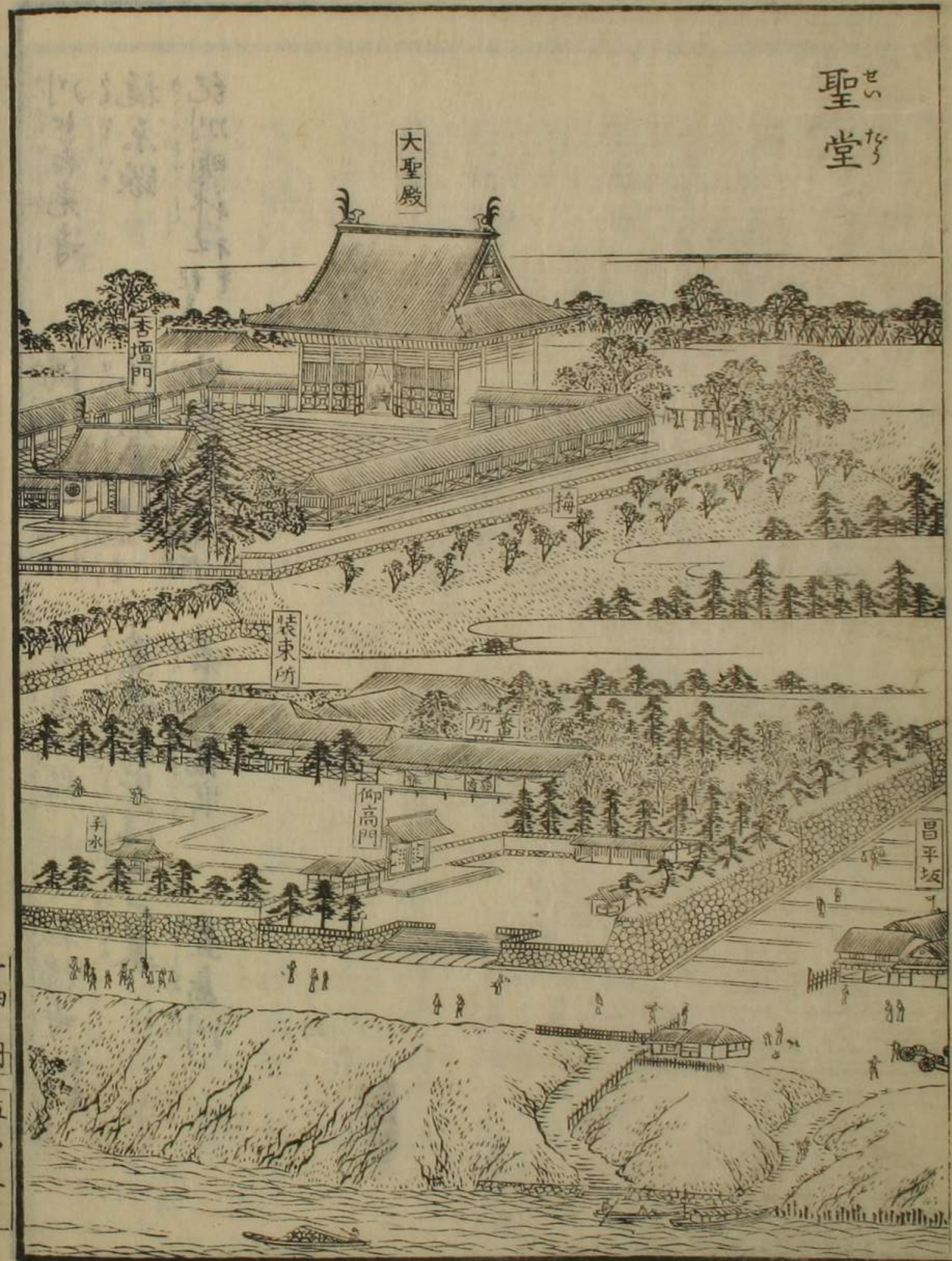
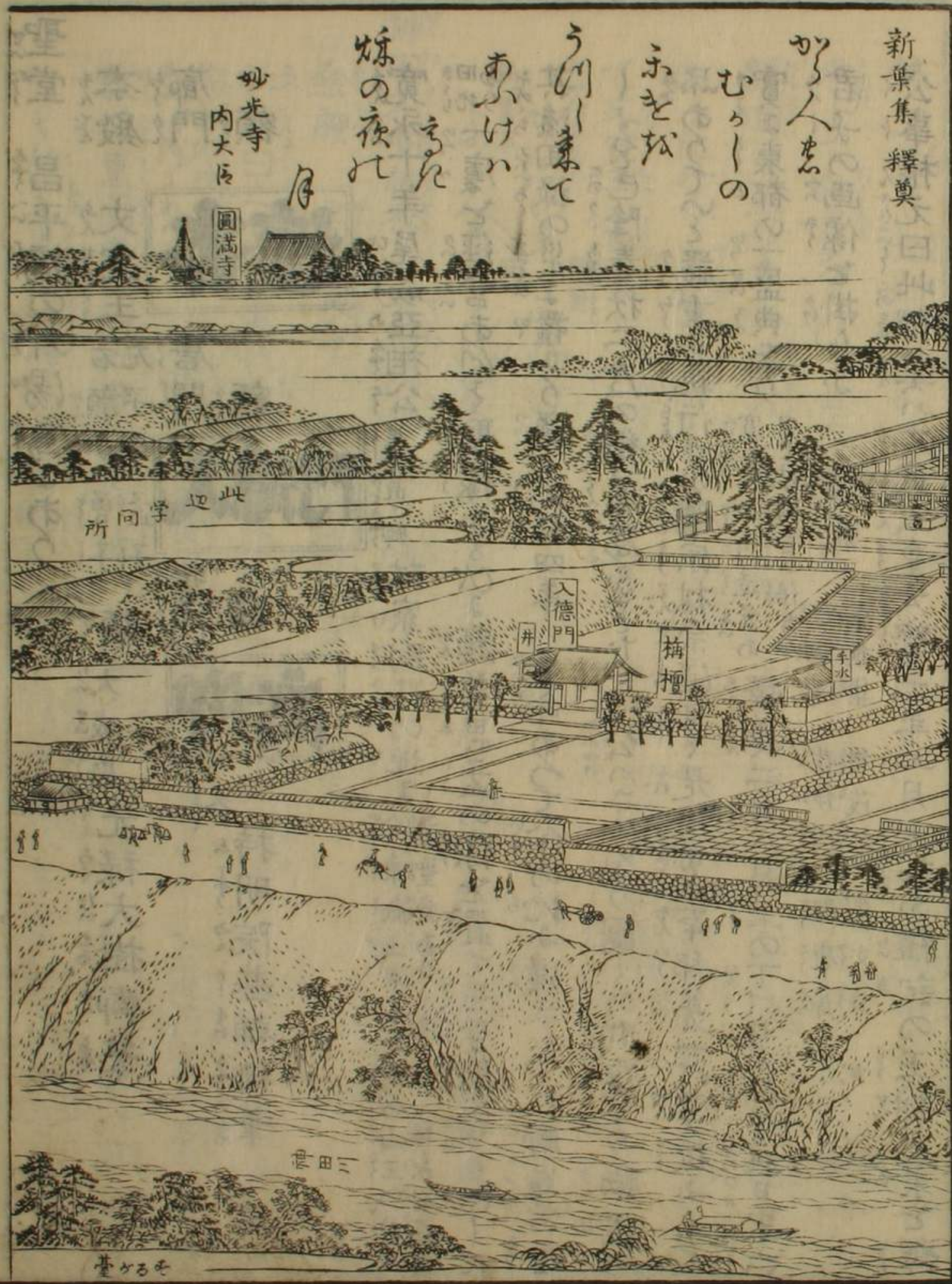
八幡宮

西谷五量寺
同東由の巻

大進物上覧の地
短冊前舊跡

花法祭の巻
除夜狐火の巻

松崎女賊天
稻付静福寺
川口渡



聖堂 昌平橋の外湯島あり

本殿 文宣王 唐子顔子曾子孟子子
廊門 額 唐子顔子曾子孟子子

檀香

門徳人

高仰

各 持明院基輔卿筆

寛永十年尾呂亞相公 義直卿 林家別荘の地

其後田祿の災は罹り遂に元禄四年 台命あつて今の地へ遷させられ御造営有
しよと己降春秋二度の釋奠怠ふことなし 公のさうあり國々の列侯より獻備の

品ありてと嚴重に執行の儒宗林祭酒世々是を司る奉邦第一れ学校にして
實は東都の一盛典あり 寛政の今内造管あ 釋奠二月八月上の下れ日に行る此日宋六

君子の画像を掛らふ 従祀 程明道 程伊川 邵康節 張横渠 歐茂叔 朱文公
公事根元曰此釋奠の文武天皇大寶元年二月は始ふ禮記の王制小菜を釋

幣は奠て先師を禮せとあり此故に釋奠といふあり後漢明帝孔氏宅に
幸して仲尼ありひよ七十二弟子を祠とみえたり又先聖と云孔子といひ先師と云

顔回といひあり周公を先聖と云孔子を先師といひ申さる唐太宗貞觀二年は
あつたため先聖先師と云孔子顔回を申さる又神護景雲二年孔宣父を改

て文宣王と申よ 弘仁格に見えあり 續日本紀字令集解等
年中行事詳合 釋奠 弘仁のあつたため先師といひ申さる唐太宗貞觀二年は

新葉集 弘仁のあつたため先師といひ申さる唐太宗貞觀二年は
あつたため先師といひ申さる唐太宗貞觀二年は

神田大明神社 聖堂の北あり唯一あり 江戸總鎮守と稱せ

祭神 大己貴命 平親王將門靈 二坐

社傳曰人皇四十五代聖武天皇の御宇天平二年に鎮座ありて其を免柴崎村に
其舊地神田橋 あり一頃中古荒廢し既し神燈絶せんとせしを遊行上人身二世眞
教坊東園遊化の砌ありに至り將門の靈を合て二座とし社の傍に宇井草庵に
むむひせ寄道場と號し 今の浅草日 其後慶長八年當社を駿河臺より川

神田明神社
かたしやうぢんのぢやう

暮景集

深夜の帰風と

いふに成神田

社あり

まふ

とん

鳴はれて

都より

たの

志



はまのたの

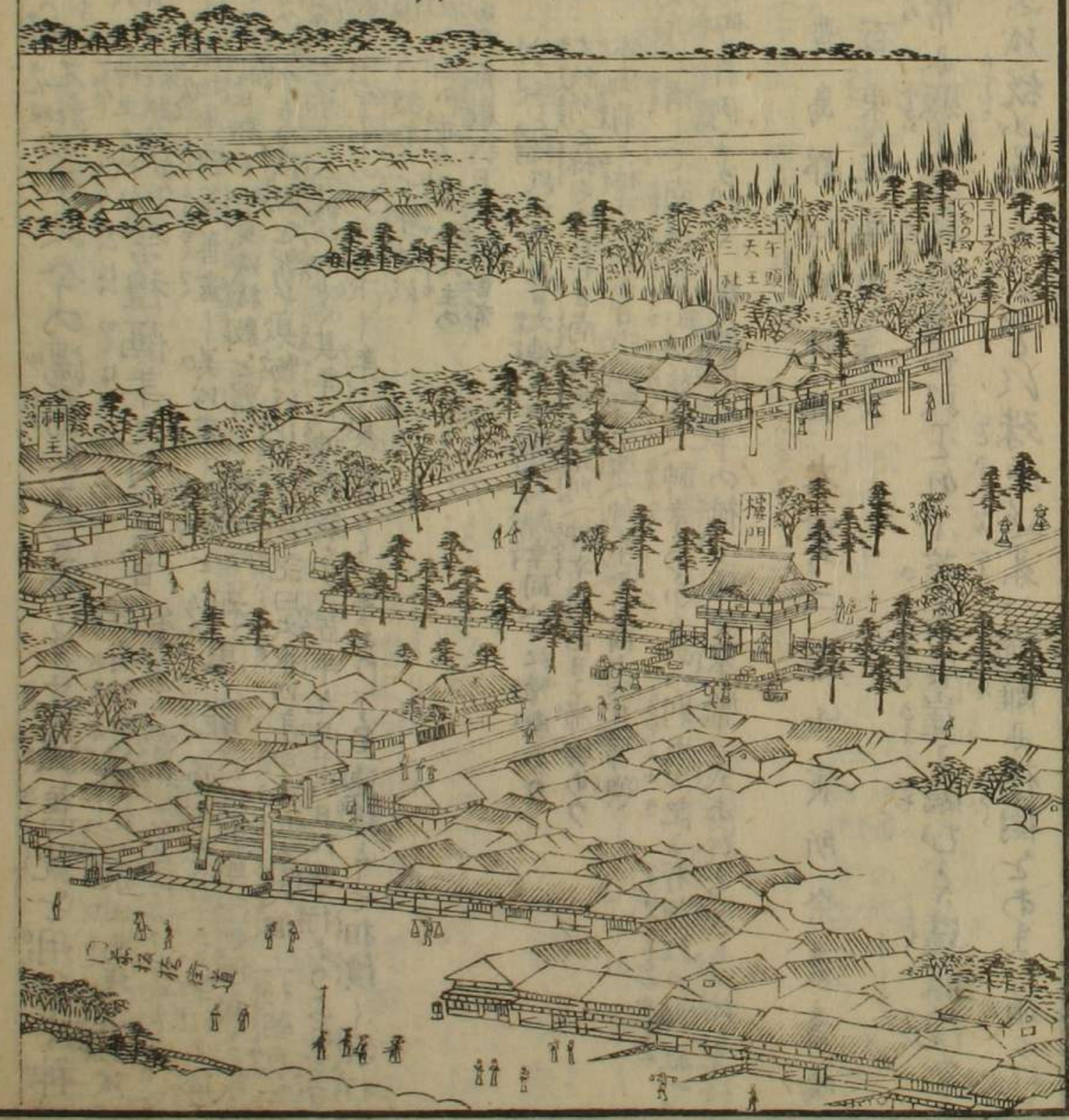
こゝろ

かふ

夜半

あり

老田
持資



元和二年又今の湯島にうつせり其儘舊號を用ひて神
祭禮隔年九月十五日
江府神社の祭礼は永田馬場山王
第一の當社とに改められ
神事能 隔年九月十五日祭
十六日無行を神祇の
公の沙汰とて徳物車樂等善盡し美公盡し町中を
祭禮は一時の莊觀之此日都下の貴賤技藝を付け見物に
臺敷ありは有の町中より技藝を付けて見物に北条五代記曰大永四年甲申北条氏綱上杉朝長と
責を以て上方より暮松をまつとふと下し年々神事能かく翌年九月十六日に無行ありされ
ありし事保の頃より改ありて中絶
祇園三社 本社西並當社北並の
神あり毎歳六月祇園會有

祭神 五男三女 王子と稱す六月五日大傳馬町旅所(神幸同八日に歸興あり)
素盞鳴尊 大政所と稱す六月七日南傳馬町旅所(神幸同十四日に歸興あり)
奇稲田姫 本御前と稱す六月十日小船町旅所(神幸あり同十三日歸興あり)
社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり)の則風土記は野謂江戸神社之
と我故に祭祀の砌舊例よりり 御城内大手の橋上あり奉幣の式あり其舊地ありに
依りてを

風土記曰豊島郡江戸神社大寶二年壬寅所祭素盞鳴
尊也神貢百束三字田云云

當社の境内常々賑々しく詣人も多しこれ茶店各崖に臨む遠眼鏡を
を出して風景を眺むのからごとく殊更近來ハ瑞籬木橋樹をまた植たれり

彌生の頃最美觀たり

萬昌山圓満寺

湯島六丁目あり真言宗みして閑山を本食義高上人

かり奉尊十一面觀世音如意法尼の御化あり
法尼の尊和帝の妃みして左右
弘法大師の御弟子なり

み六親音を安置以當寺に世に本食寺と稱す

寺傳曰閑山本食義高上人を覺海と號し足利十三代將軍義輝公の孫

義辰の息あり 義輝の子孫あり日向國に産み幼より瑞相あり小仍て出家し

肥後國佐土原の福禪寺に入り覺深師に隨從し本食と稱せり寛文八年衆

生化益のために東奥より下りてあまねく靈地を澤しあかしく堂宇を建立を仁和

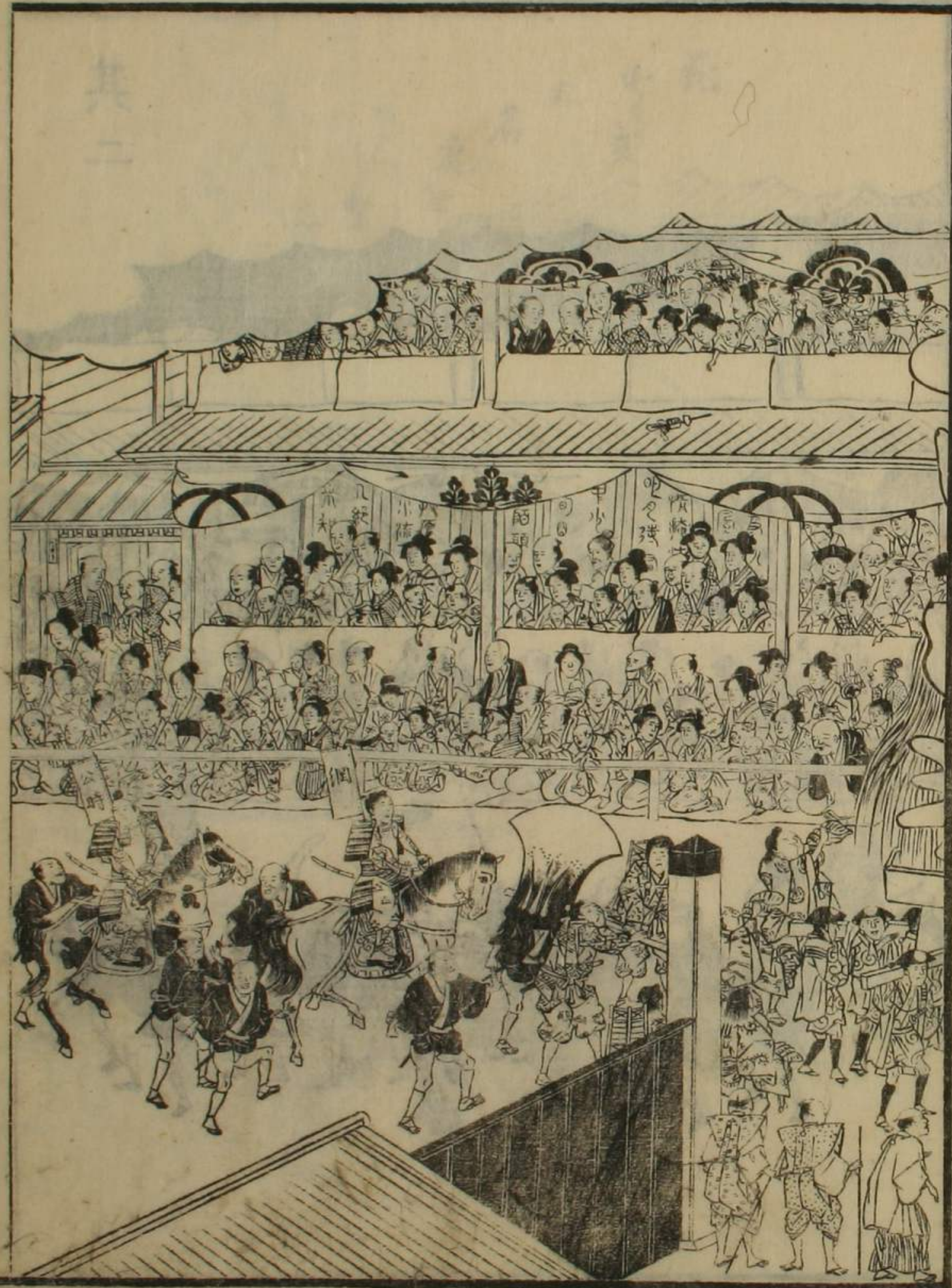
寺宮道永法親王此事を聞し召れ感稱ありて傳燈大阿闍梨權大僧都法印

み任せし其後西園に赴く頃も大に奇特を顯し延寶三年十月都小上り

堀河姉小跡多門寺に止宿あり頃微疾を患へ同年正月廿一日自臨終の

期を知り時諸の菩薩來現ありて示して曰唯今の汝が臨終の期みあ

らば早往生せんと思ひ猶大願以企普く衆生を化益せんと云仍同五年



神田明神

祭禮

隔年九月十五日

執行山氏子の

町くまを練物車樂

出に申すも

大江山凱陣

牛若丸奥助下

朝鮮人來朝の

あたら孫遠近に聞て

其名高く

最

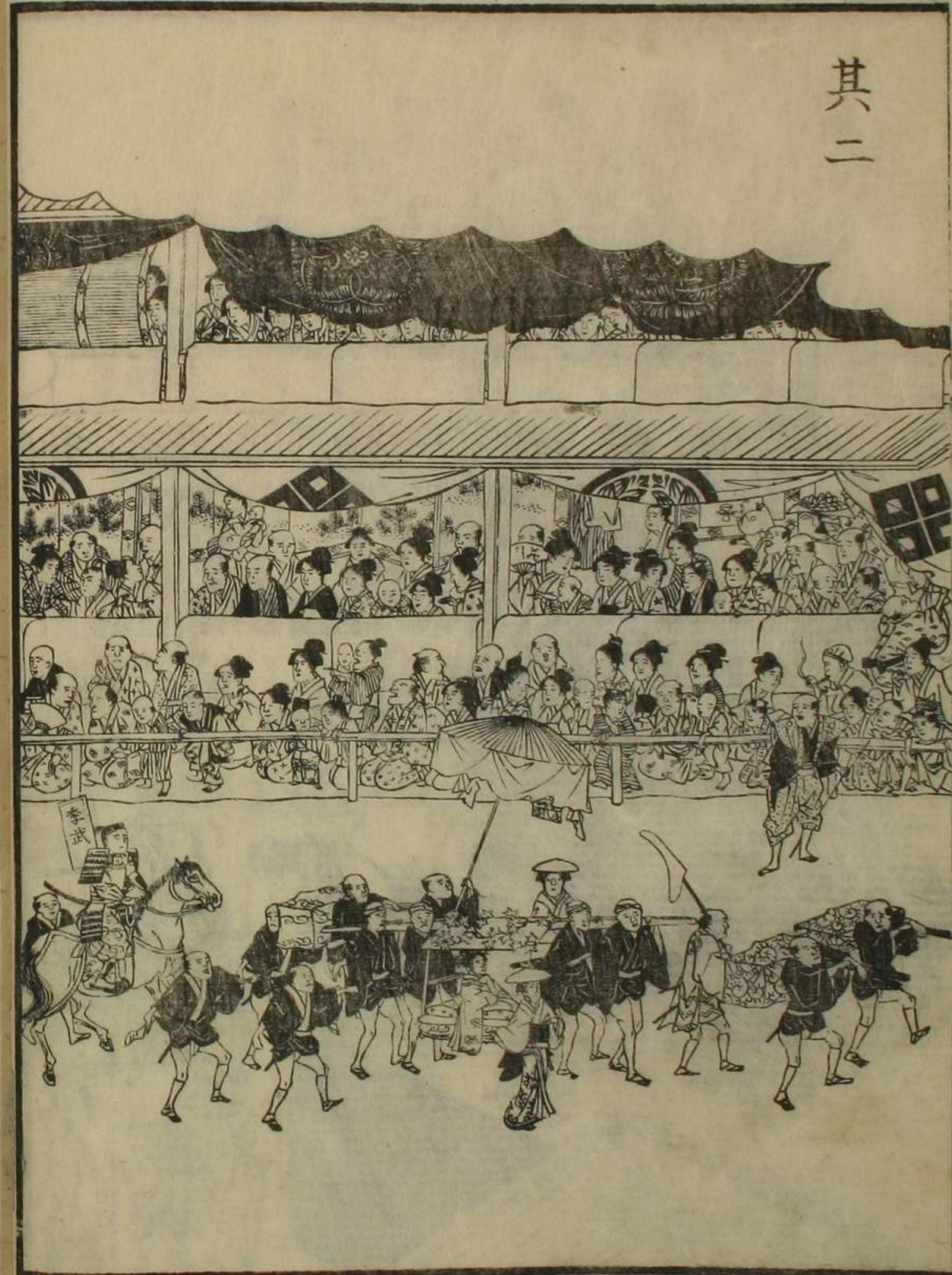
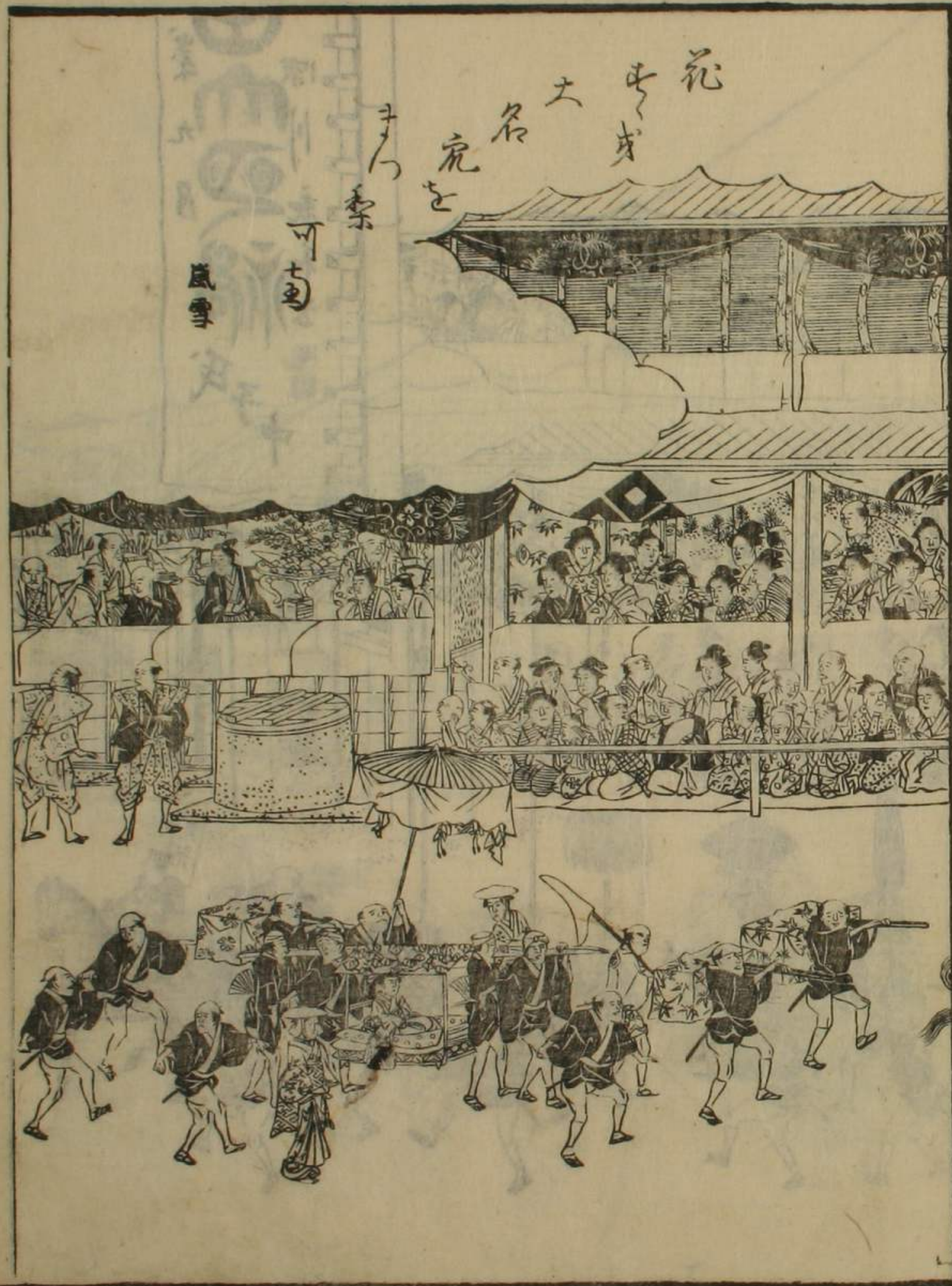
美観

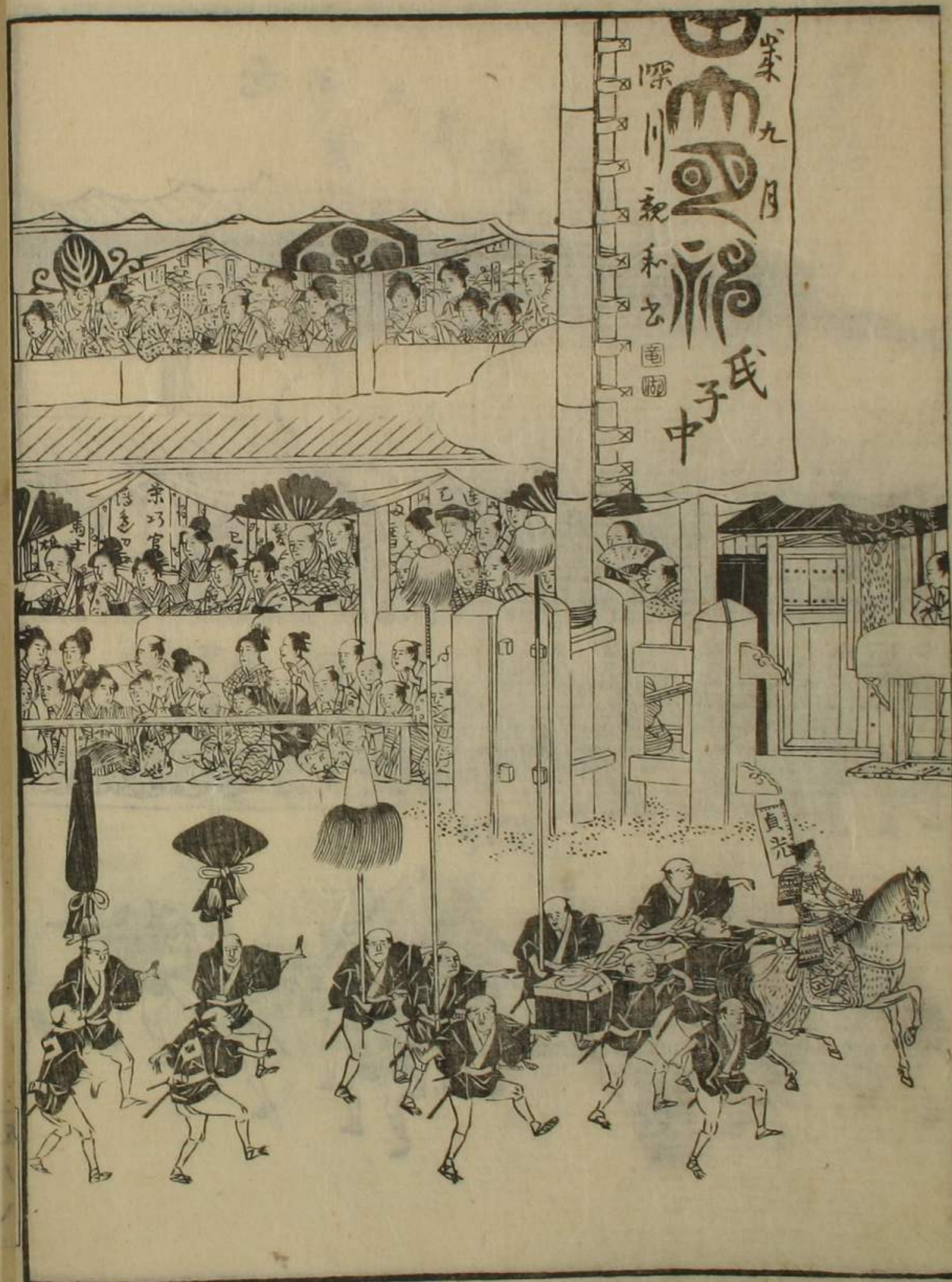
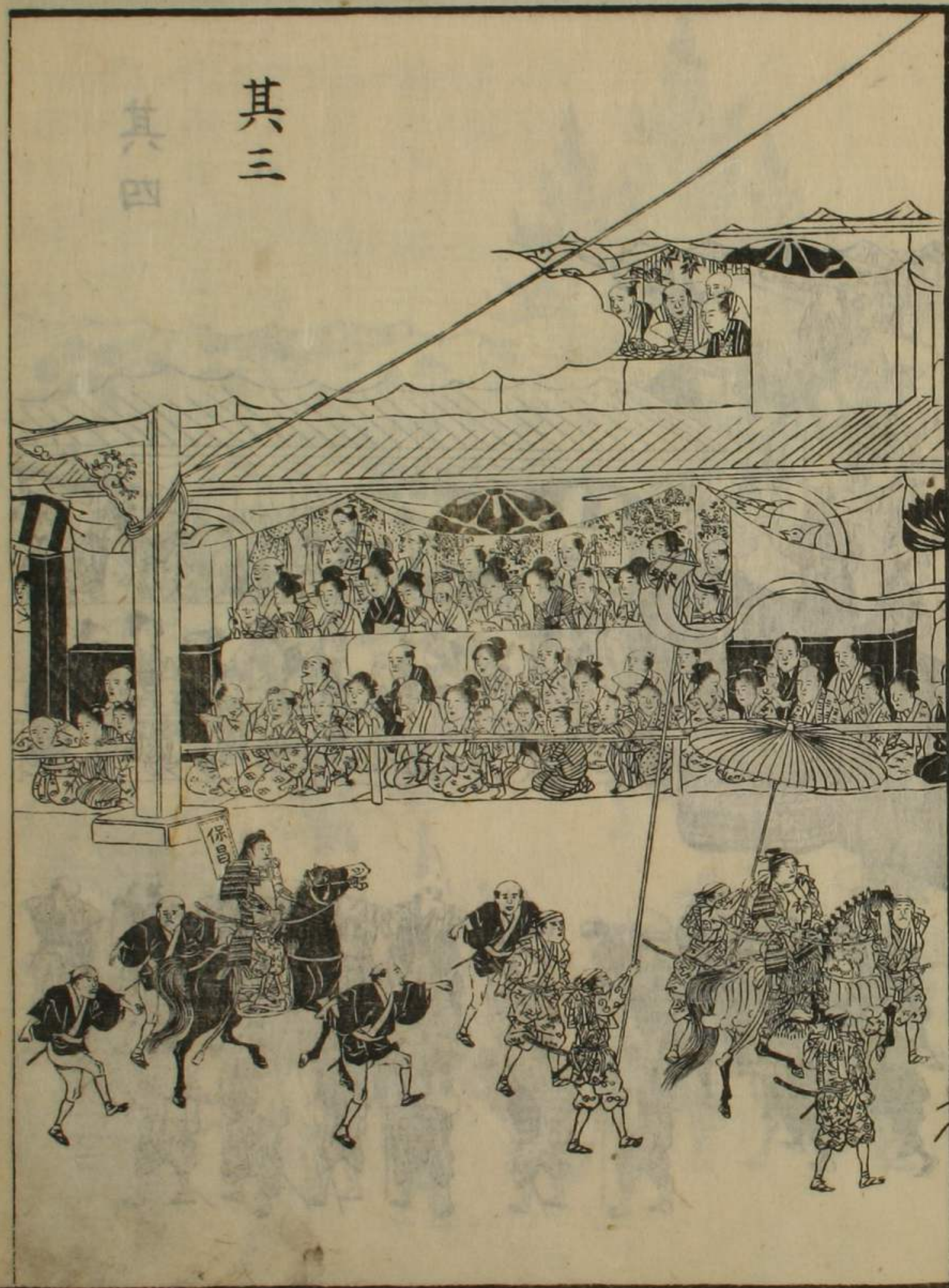


大江山凱陣

東江源辨吉

園







江城湯島の地に至り彼佛の教を随ひ諸人れ求に應じて無量を願ふ
 成就し大に靈驗をありり同七年所室宮人參ふは行法の嚴重なるを
 所感あつて高野山光臺院の住持職に任ぜられ又天和二年七月十三日
 參内を頭申將隆真卿の傳奏あつて光臺院住持職勅し應じ國家安
 全寶祚延長を祈奉るべき旨倫旨被賜ふ祖先の忠義に仍て名実の又元
 祿四年志願によつて光臺院を辭して江戸に到り奉郷三組町に住せり
 其頃
 大樹 常憲公とて浄光院殿須山女を以り御祈禱を仰附り奉室永
 六年上京に此時昇殿を許され同七年江戸湯島の地に梵刹を建
 萬昌山圓滿寺と號し
 大樹 文昭公の所志願より今多彈正少弼忠晴奉行たり則上人を以
 て當寺の所山とて享保三年六月七日化縁の勤盡く終り春秋九十五歳
 ありて遷化せり以上所山傳の
 器と奉

圓滿寺

俗に本食寺
と云



寶林山靈雲寺 大悲心院と號し圓滿寺の小れ方にあり關東真言

律の惣奉寺ありて覺彦比丘の開基なるを

灌頂堂 西界大日如來と安置し

大元堂 灌頂堂のうしろ方に大元明王の像あり元祿大徳の御筆に

朝の後美和二年奏聞を経て小栗柄の法常の器を稱して此秘法と撰く常曉歸

怨等の書見えり又延喜式云蕃索式曰凡大元帥法毎年

鐘樓 覺彦和尚自銘を依る

寶林山靈雲寺 鑄鐘銘並序

武都北郊有一勝地四埜廓落四方之衆易來而投

擁一丘崛起一天之星可坐而算管祠良聳神鬼常作

互和龍城聖時靈岫遙為鎮護東嶽天澤後聯鐘梵

從四位下柳羽堂前源保明者幕府之侍臣也天性

篤佛之忠不務戒檢以故象教從設無益因啓俗幕

府堅請伽藍之地以囑貧道使今茲仲秋之二十

大將軍下旨賜許斯攸予乃夷榛莽卒勅營構選通

競趨緇白佐助自閏八初二始斧以孟冬之半土

木之績倏示告成從四位下牧野備後刺史源成貞

者時之股工也締造其樓今月初四樓鐘偕就以惟

鉅鐘之興起也者本是樓喜捨家命于臆氏鎔成

斯將軍之賜而二公醇信之所致也予欲使後生有

大將茲欽遵佛制力荷教法上以禱也予欲使後生有

感于茲欽遵佛制力荷教法上以禱也予欲使後生有

以增士民壽福也乃為銘曰法上以禱也予欲使後生有

城北福庭山號寶林元帥賚地實比布金

作夫四集役工日臨彌歷七旬棟宇成森

牧野備公為時股肱命工畢萃龍鬼熱醒

架樓突元効響鏗鉤迷夫天真何有垠埒

聲雖本有乍起乍減法音遍益

圓性融相誰縛誰泄

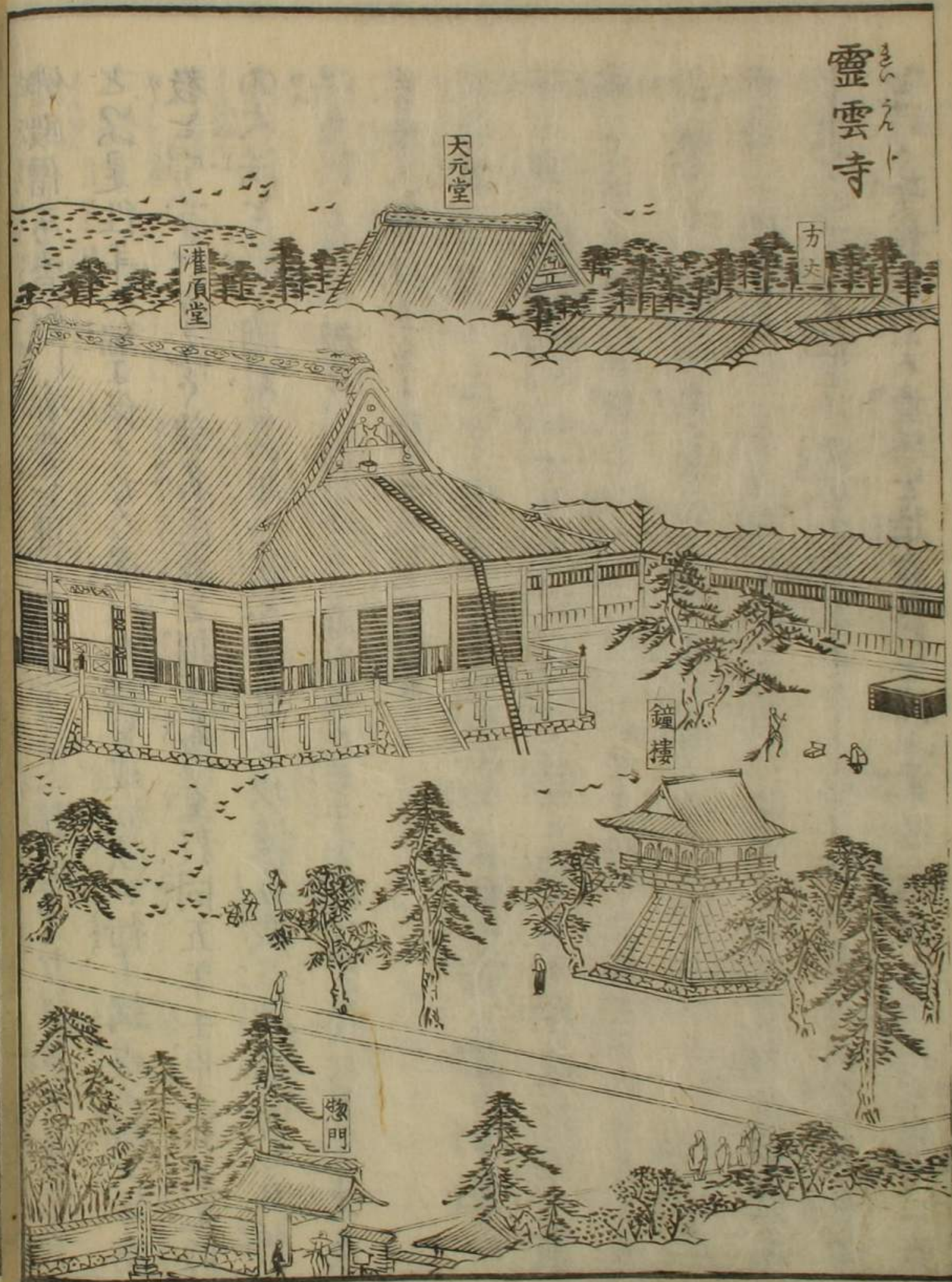
元祿四辛未年孟冬

地藏堂 奉尊地藏菩薩 弘法大師あり

開山諱の淨嚴字の覺彦妙極と號し河劔錦部郡小西見村の産也

後秦 寛永十六年己卯十一月廿三日（つちのとうら）に生ふ四葉ありて普門品尊勝大
陀羅尼は誦は奇標穎悟夙因の發する取へ凡耳目の歴る取終る遺忘はる
事なく衆人是を神童と稱せ慶安元年戊子高野山檢校法印雲雪が禮
して難捺を昔に年十歳朝參暮詣倦事なく紀昶亞相公 頼宣卿一彦
見たすひく深く是は器ありと真みされ方外千里の駒なりとの言ふ
遂に真言の諸流に秘奥を究む又餘暇あふとれを孔老を以て諸子百家
歴史等涉ぶると後かゝ常は法戦の場を臨むに向ふ取敵かゝ貞享
甲子冬錫を開たし飛に其曉瑞雲ありて東を指其色赤黄みして長さ
と數十丈され和尚の法化將み東方に振えとるの兆あり一度東都に
來りてより法教は城の下に震ふ仍も和尚の道香は慕ひ弟子を禮は
設厚くされは遇はる輩をこれに元禄四年
大將軍 常憲公 召見し多以普門品を講せむ雄辨泉の流あがごとく聽者
欣然とて善と稱は遂に城小くして地を賜ひ梵刹は經始はつとよきひく

佛殿僧房香厨門廓覺と連ね巍然とて一精藍をなれ號く靈雲寺
とて是往年の瑞は依りたり遂に密檀と建秘法を行講經と鋪大密
教を唱ふにぞんと諸名匠衣を摺て來り至教同五年壬申六月大元帥
の大法を修し國家昇平を祈ふされりて以後毎歲三神通月七日修
法を於ては永規とて翌年多麻郡の戸若子を割て香積に充關東真
言律の僧統となしたまふ又乙亥は夏
大將軍 常憲公 齋戒し多以大元帥金剛の像を畫き奉尊に
下し賜ふ 今大元堂に 同十年丁丑僧俗の請は依り曼陀羅を因く檀
場に入者九万人み幾し 隔年灌頂を行ふ 既元禄十五年壬午六月廿七日
諸徒は召遺誠懇懃なり我今法界三昧ふ入といひて恬然とく順化は
世壽六十四僧臘二十七時は顔四十許色相怡悦とて平生は勝る師常小
弘通を以て己が仕とて受取の助帛をこゝと貯えは又みまらに費さば佛像
を造り聖教は索め堂塔を構貧窮を濟ふ若後後論を講説を於て二百



妻戀明神社



三十六會殆三十席秘軌と授ふこと五回著述を於野の書三百卷余度せ
 於處の僧尼四百三十六人具足戒を受ふ者十有三人阿闍梨を得る者二百六
 十八人受明灌頂は受る者一千六百三十一人菩薩戒を受ふ者一萬五
 千人其余の法化の奉て數ふるは往哲のいまも發せざるを發し先賢
 志明うなつばふはあはれふは法化洋々として天下に彌布し王公と
 下愚夫蠢婦に至る迄敬仰せむといふことあり今古のあはれなる所
 實に總持復古の師なり 以上當寺開山傳の要を摘ぐるに記す
 妻戀大明神社 妻戀坂の上にある万治年中開祿ありて後今の妻戀臺
 へ遷らせり

祭神 第一殿 倉稻魂神 第二殿 日本武尊 第三殿 弟橘媛命
 社傳曰當社を往昔日本武尊東征の頃行宮の地ありと云々
 按に日本紀に日本武尊東夷征伐の時妃弟橘媛海水に入て野國確日旗に
 登り東南の方と望たまひ五音婦者耶と宣ふよ見えり因り考ふに此地も東
 征の時行宮の地ありと云々彼尊を禎奉り妻戀臺慕ひたまふの意を取て直り

妻戀明神と号す。今稻荷明神をりて其の號を稱す。往昔社地も妻戀墓の下にありて境内をゆるる廣くりに救度名兵火小四惟大に荒廢よき。比纒社形の形をりて残せり時天正年中

神君當社より祈願の事ありて新二丁四方の社地を賜ふ。又寛永五年台命みよる

湯島天満宮 妻戀明神の小れ方ありて右田道灌江戸の静勝軒ありて頃

者あり乃愛中深を其所の尊容を彷彿せり。以て直に城外の小に祠堂を

宮彼神影と安置し且梅樹數百株と栽美田等を附せ即當社是あり

以上諸社一覽江戸各所記等の書に出るとも思ふ。其の誤りも勘明平河天神に

湯島神社 五ノ戸 照明神と稱す。奉社の後れ方あり則地主の神あり

風土記曰豊島郡湯島神社雄略天皇御宇二年癸巳

天澤山麟祥院 同所北の方あり臨濟宗江戸四箇寺の一なり

恩山天澤寺と稱せしが春日局の奉尊の釋迦如来円山へ渭川劉和尚

寺傳曰寛永元年甲子 二代大將軍の 命みよるて當寺を春日局

等皆雲谷 同五年 三代大將軍 不豫ありてせられしと其局自ら

東照大権現の 神前詣りて禱て曰妾が身不浄ありと之も昔も乳

北国記の湯島と云ふ所あり古松をたけりて連のちちみ

武藏野の遠望を懸たふに寒村の道せり野梅盛み薫ばれり

志の東風吹むと之を遠くまのの神を梅がま 亮惠

湯島神社 奉社の後れ方あり則地主の神あり

風土記曰豊島郡湯島神社雄略天皇御宇二年癸巳

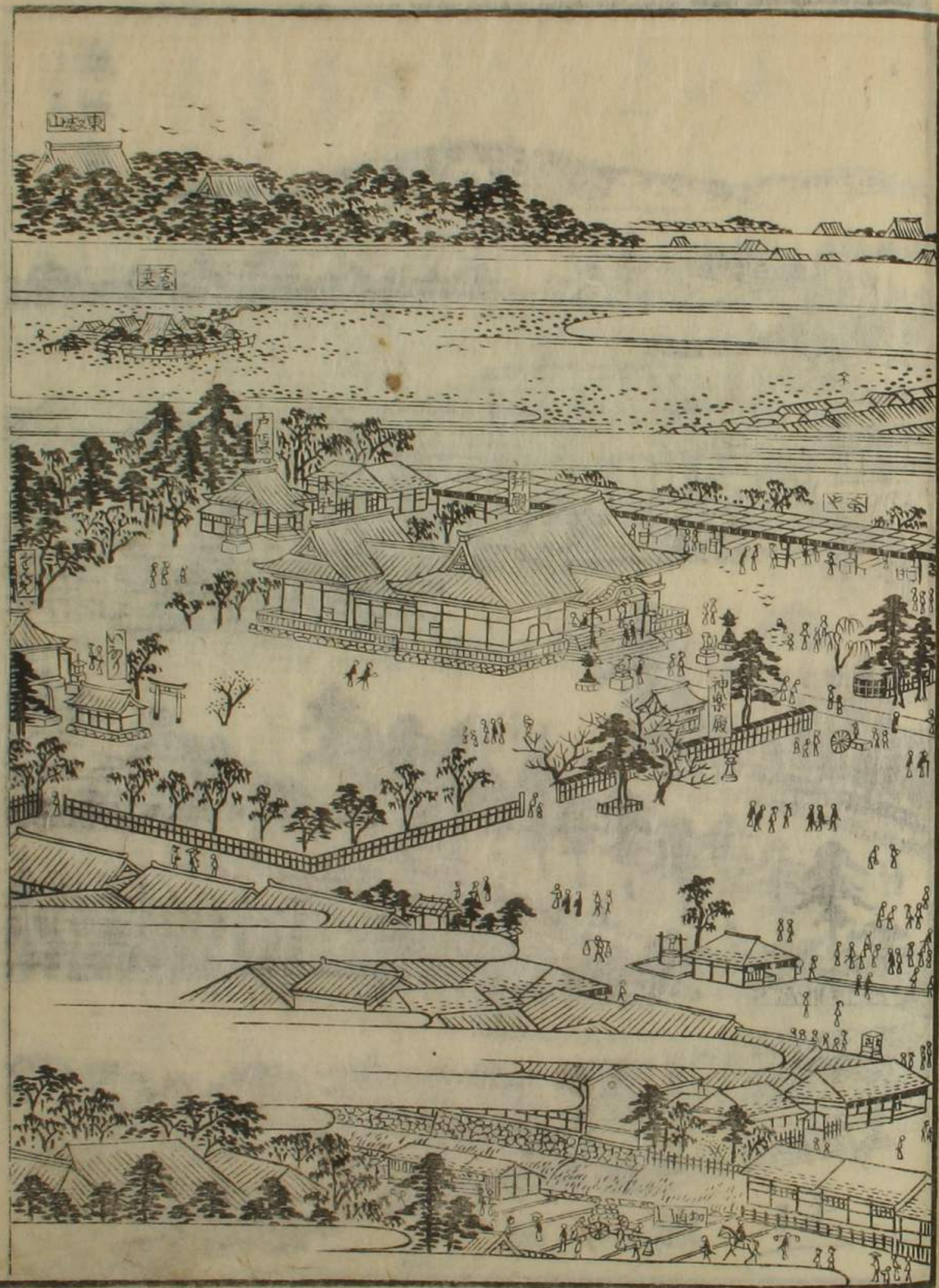
天澤山麟祥院 同所北の方あり臨濟宗江戸四箇寺の一なり

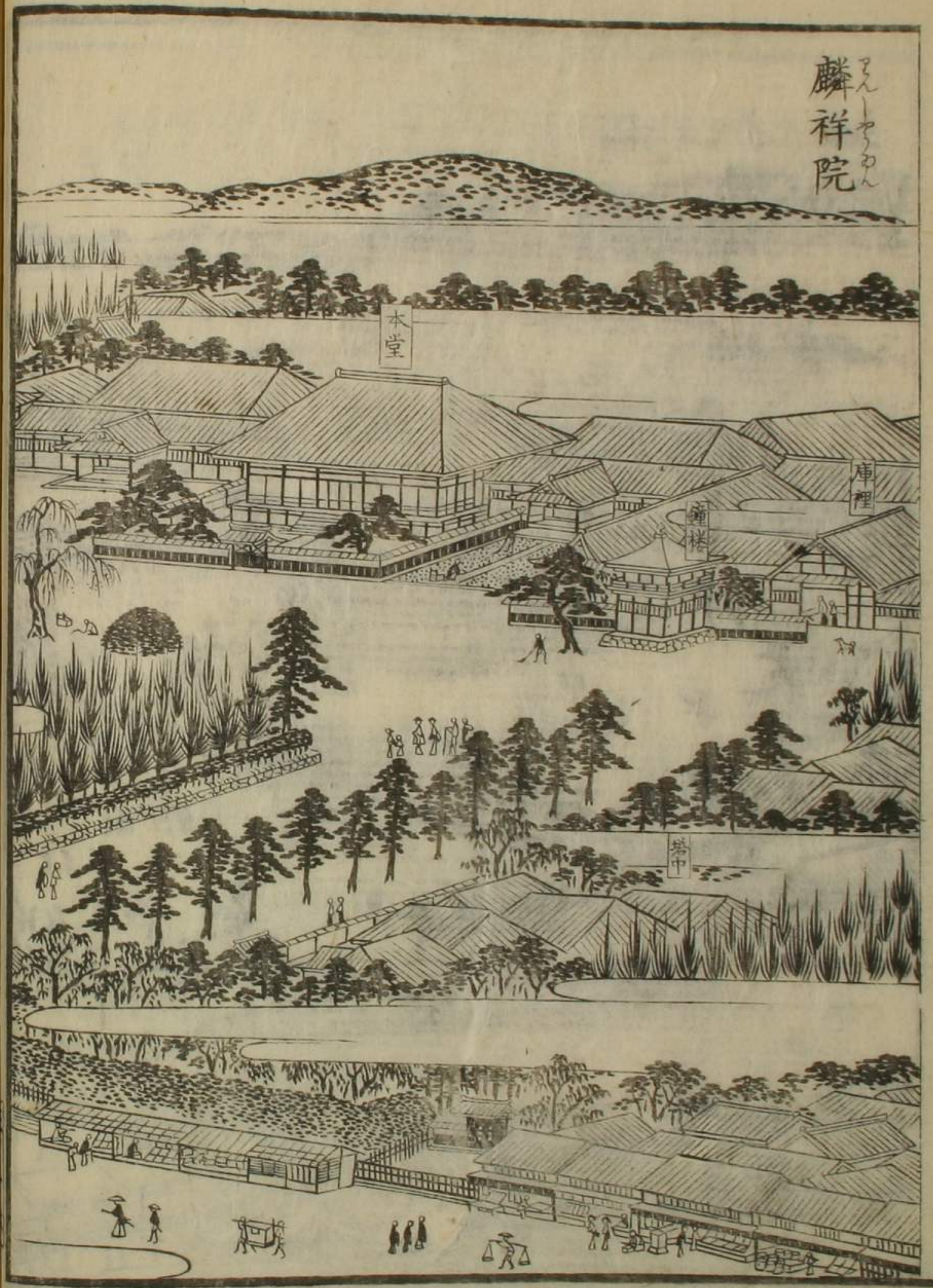
恩山天澤寺と稱せしが春日局の奉尊の釋迦如来円山へ渭川劉和尚

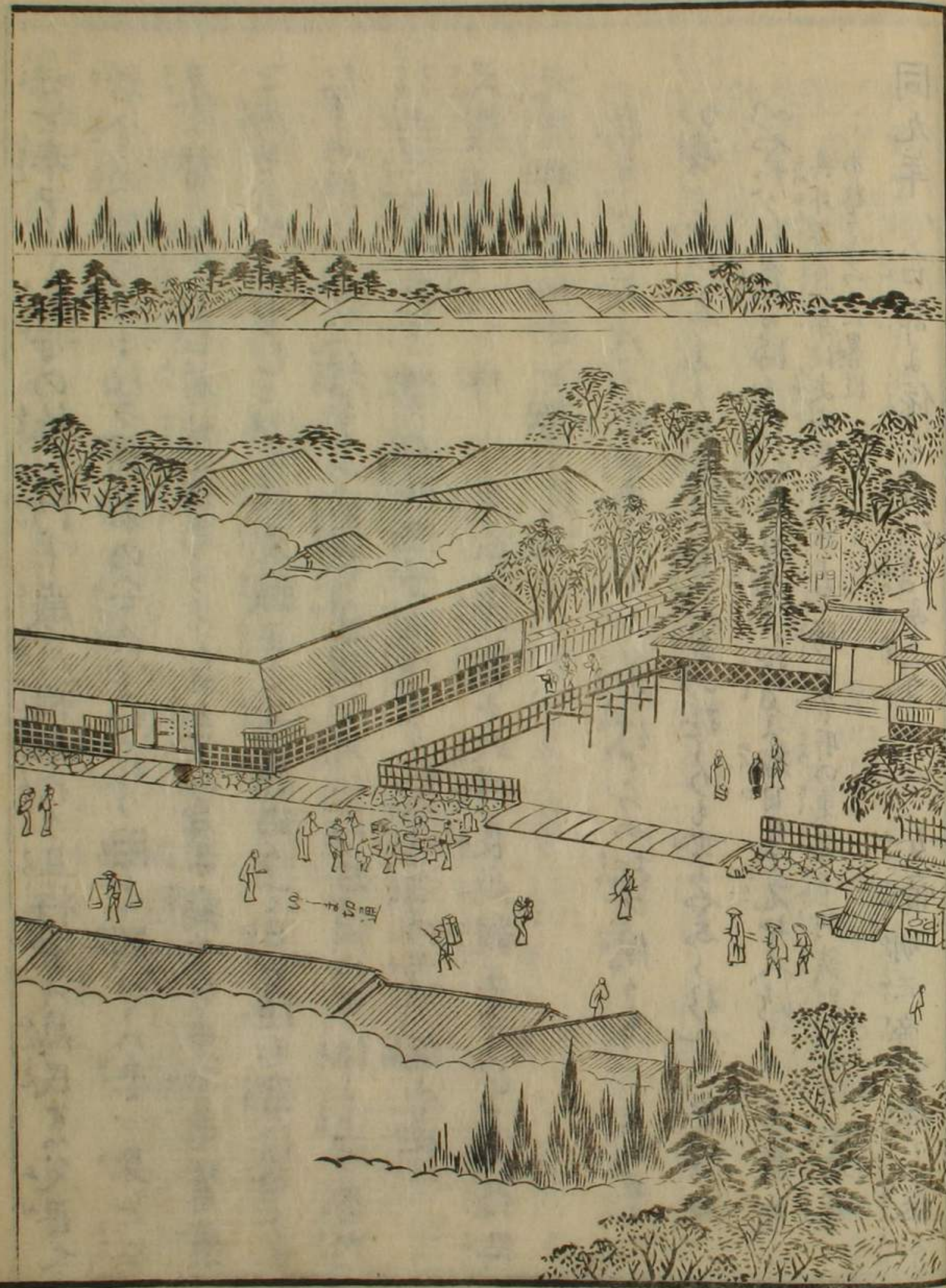
寺傳曰寛永元年甲子 二代大將軍の 命みよるて當寺を春日局

等皆雲谷 同五年 三代大將軍 不豫ありてせられしと其局自ら

東照大権現の 神前詣りて禱て曰妾が身不浄ありと之も昔も乳







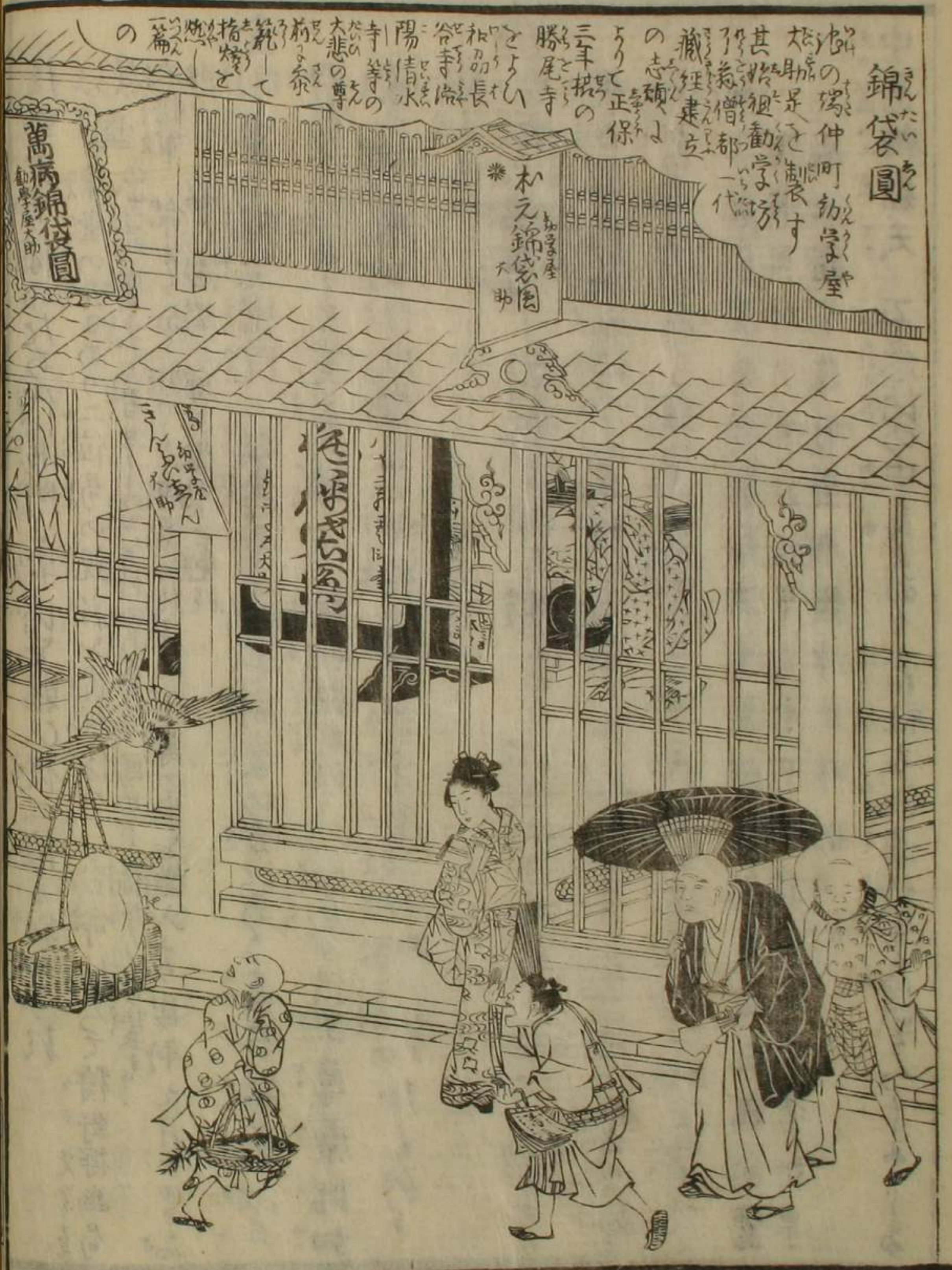
根之生院

本堂

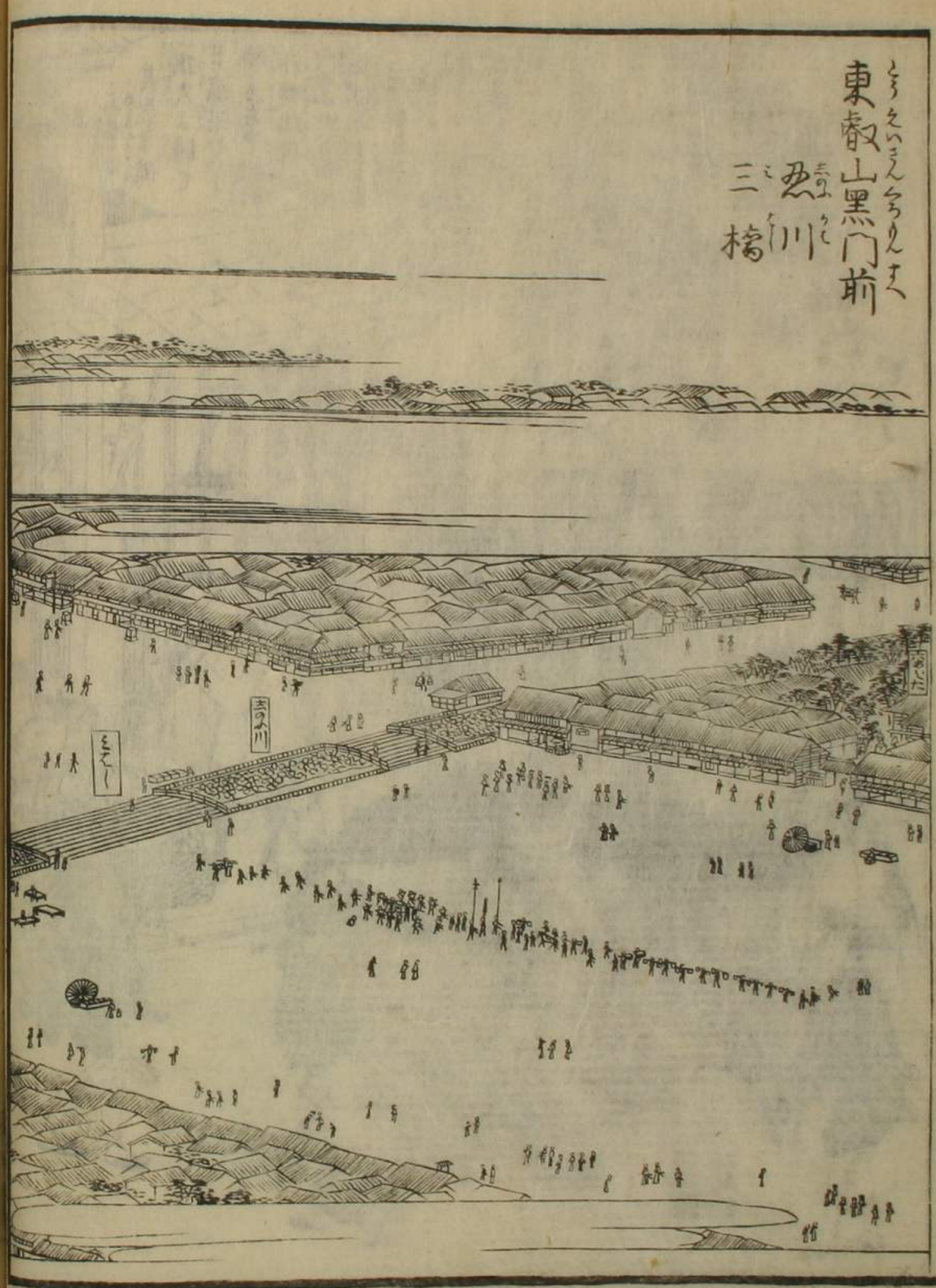
方丈



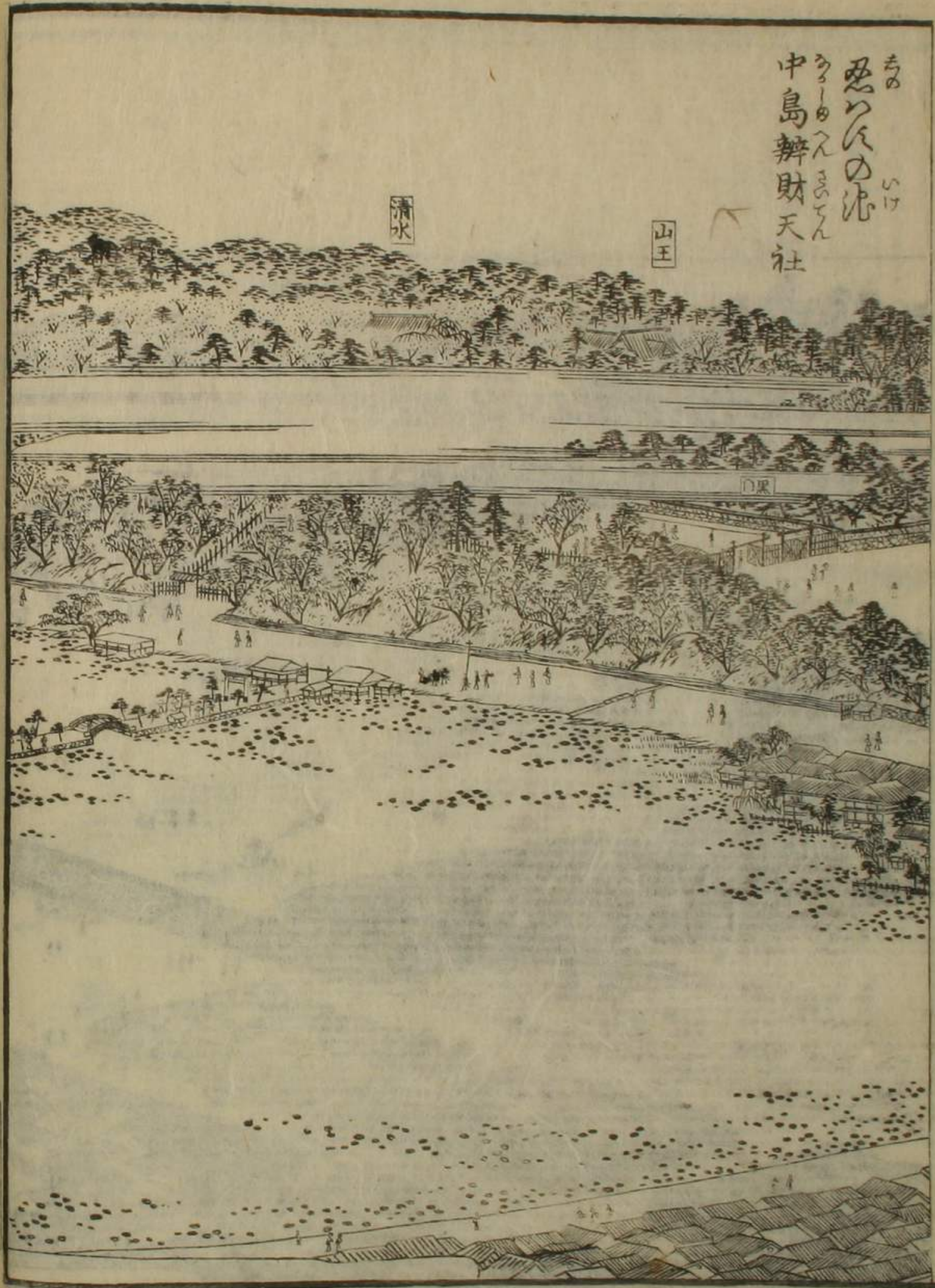
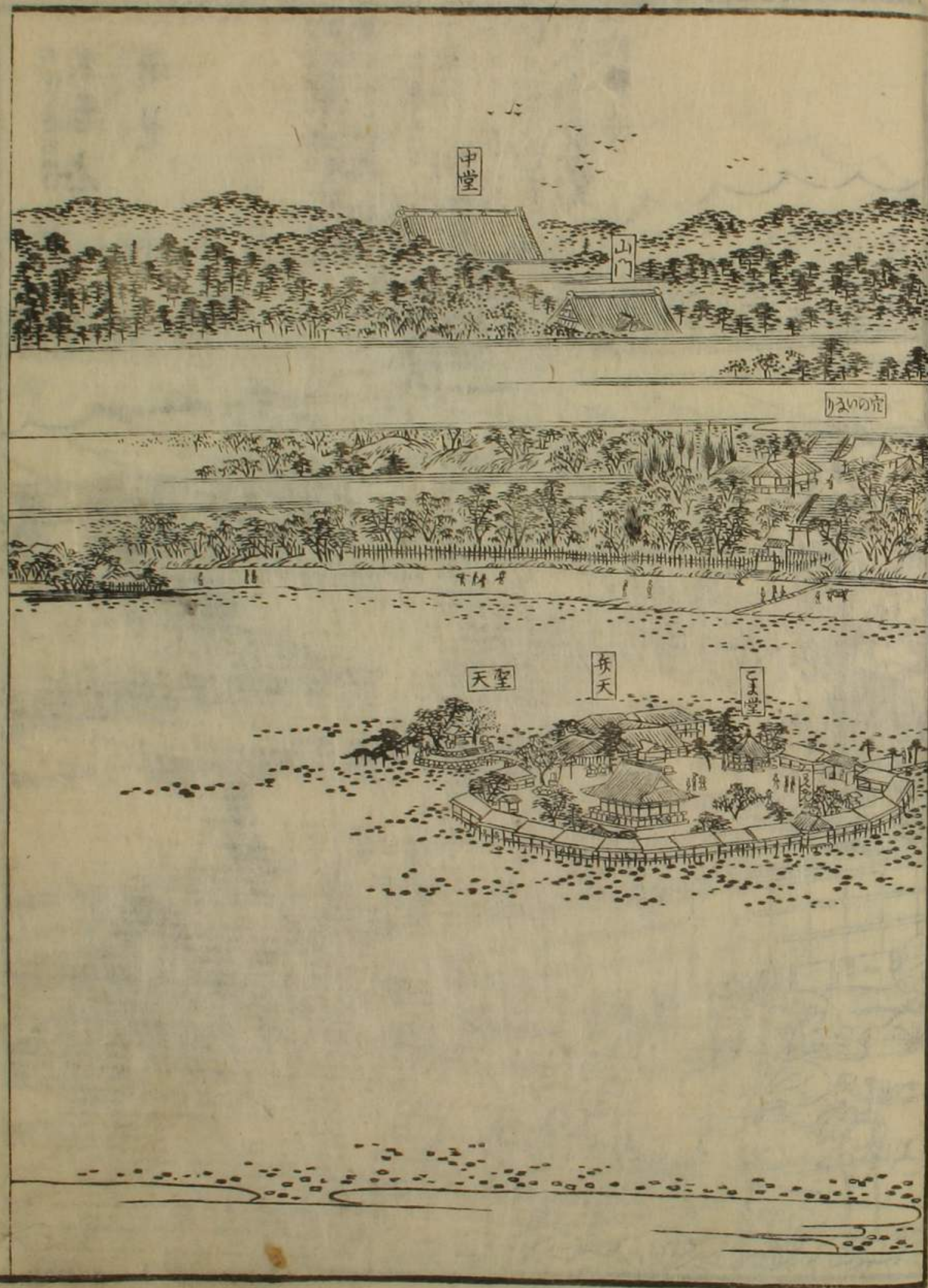
志願の全き事
 得たりと
 一城建立の料は
 靈藥と製し驚て意は其價
 候き病錦袋圓と号彼
 ち一は於て此地は病と
 二百人必百愈せん云事
 其後衆人の患者は用
 眼せし其指の病類は愈
 彼藥と製して
 差さるて後速は
 て授らるて後速は
 一靈藥と製し
 錦袋の中より
 の元山如定禪師
 乃興福禪利
 時、後中肥前
 苦痛甚か
 一指大腫て
 其の翌年彼
 書と



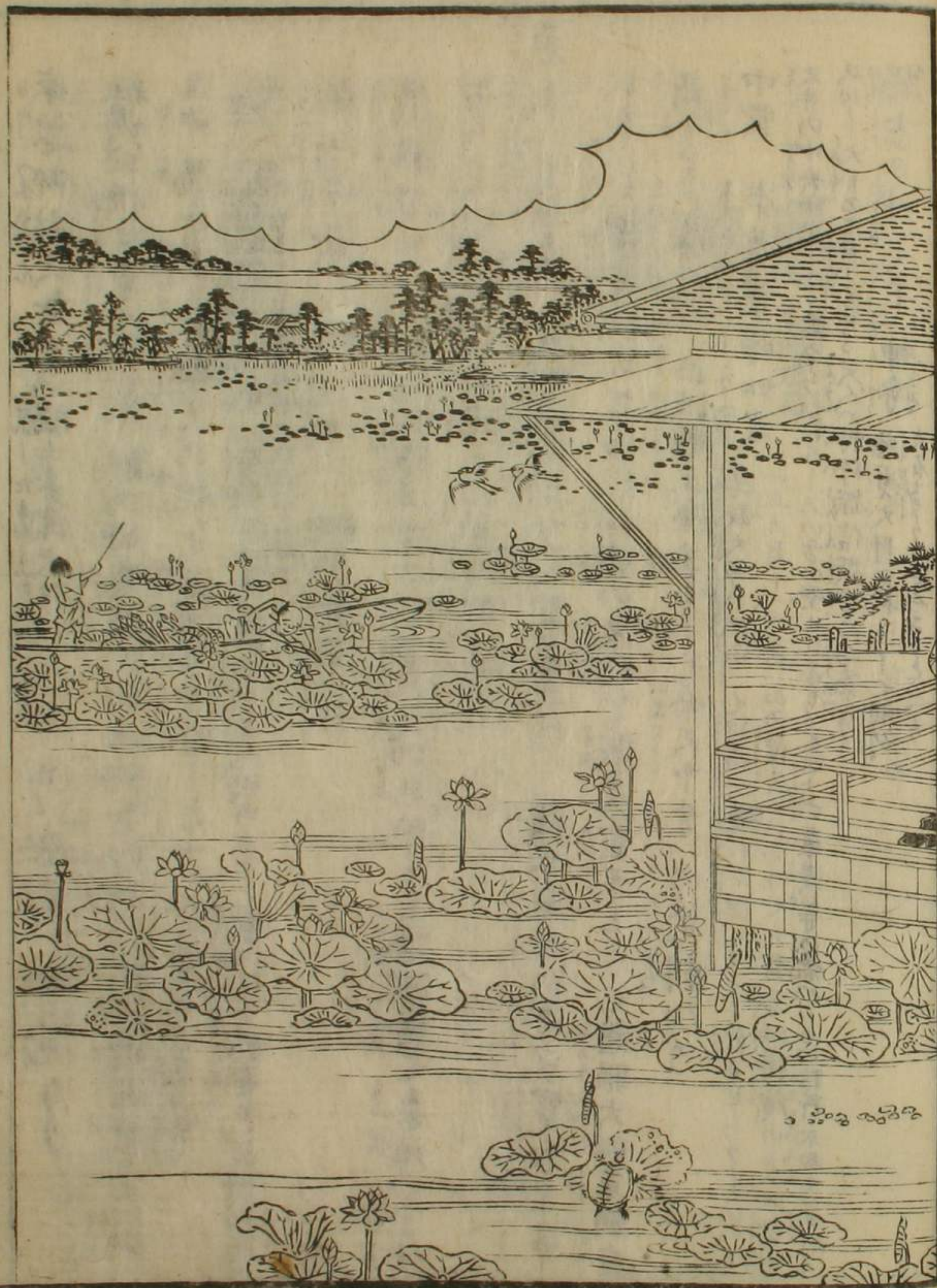
萬病錦袋圓
 お元錦袋圓
 其の功足と製す
 其の祖勸学は
 其の建立は
 其の志願は
 其の正保
 三年根の
 勝尾寺
 谷長
 陽清水
 大悲の尊
 前々茶
 龍と
 指燈と
 の篇



東叡山
黒門前
三橋



忍び人の沈
 中島辨財天社



あつきのいけ
不忍池
蓮見

あつきのいけとて
不忍池は江戸第一の
蓮見の地なり夏月には
荷葉の青と水の上の
蓮の花の紅白の
色をとりて
あつきの蓮を
見物とする
の蓮見の地なり
の清観とす



奉尊辨財天と云ひ脇士多聞大黒の二天とも慈覺大師の他あり

社傳曰往昔東叡山草創の時慈覺大師此池を江列の琵琶湖みかたら新

又中島を筑立て辨天の祠を建立せられと云云江戶名取記の水谷伊勢守

聖天宮本社の北の方小島小勸請す此島其始天の祠あり舊池あり其頭もこの聖天の宮

紫銅華表額 天龍山 細井廣澤筆

昔離島小にて私めて往來せしと寛文の未陸より道改築て糸清の人便

東叡山寛永寺 圓頓院と號す人皇百九代 後水尾帝の御宇寛永年中

比叡山延曆寺に比せられ江城の鬼門を護るの靈區として慈覺大師草創有

爾より己降代々一品法親王座主として今天下才一の林刹たり

中堂 奉尊藥師如來傳教大師の他ゆては勿夫建村石津より移せりといひ

脇士 日月二大主二神將天井の中央小畫ける龍ありひにうららの壁上に居せる不の十六羅漢等の像はともによつて移り

脇壇 不動明王 智燈大師の他 多聞天 定期の作

瑞瑞殿

額 靈元法皇震筆

竹臺 廊門のうら方右にあり昔慈覺大師入唐の時五臺山の竹を根うに携りて歸朝ありとす盧尾しるる書に見えたり世にこの竹と山王権況をいふ八百萬神の影向なり

南花堂

額 後水尾帝震筆

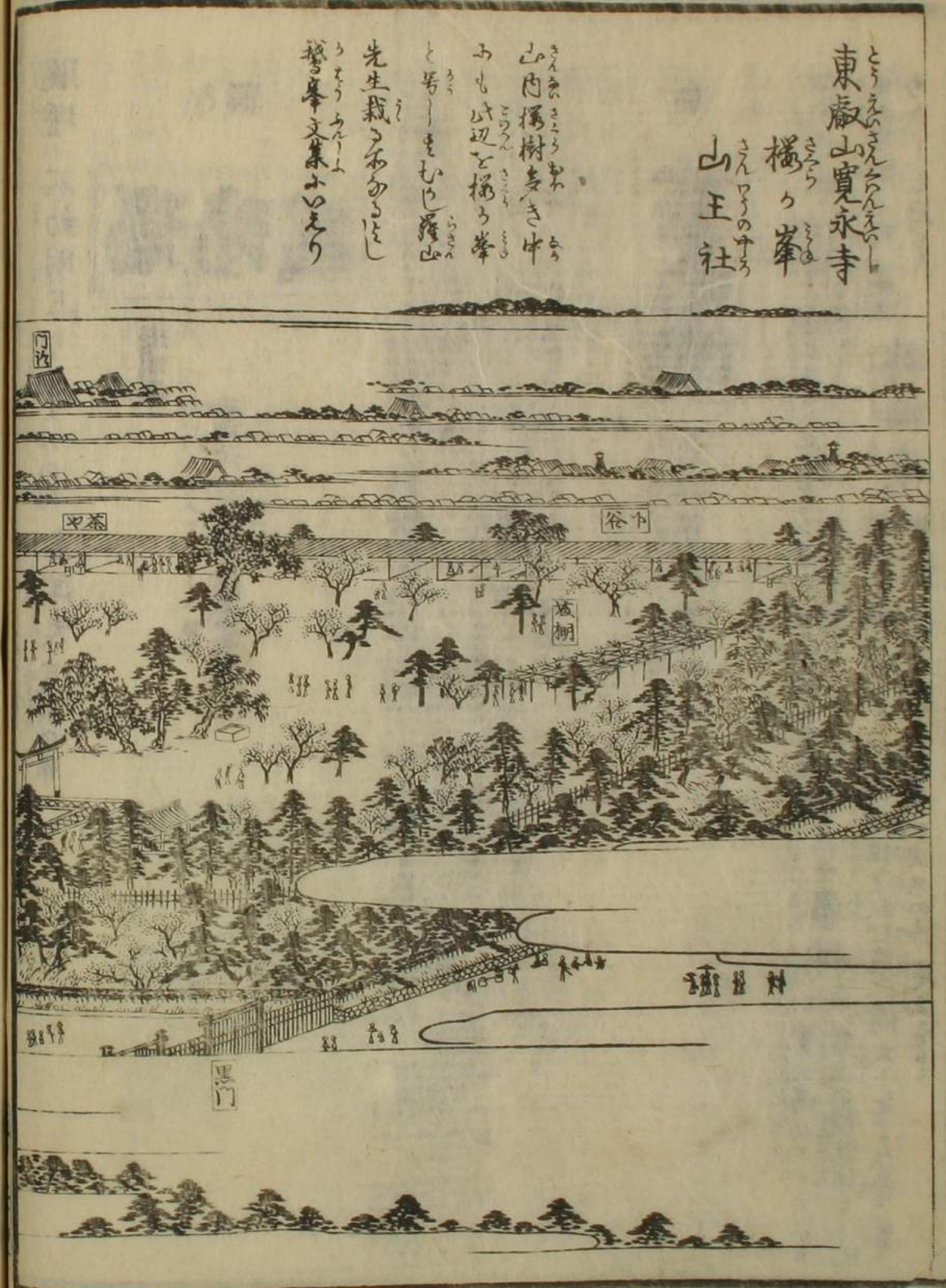
雲水塔中書のかたの旁にあり多宝塔と高比塔の初巻取 三十番神社雲水塔のうらに有
転輪藏中堂の前のうらあり一切徑を収む前に傳大士をいふ普賢
普城の像を置この堂の水府公の寺建立あり

東廠山上陽春衣
 東廠山下背花歸
 回看終日酣歌處
 風起晚來爲雪飛



東廠山寬永寺
 櫻ヶ峯
 山王社

先生裁之如何
 警學文集小のり





木のりこ

けを

鈴も

さくら

りみ

芭蕉

木

下馬

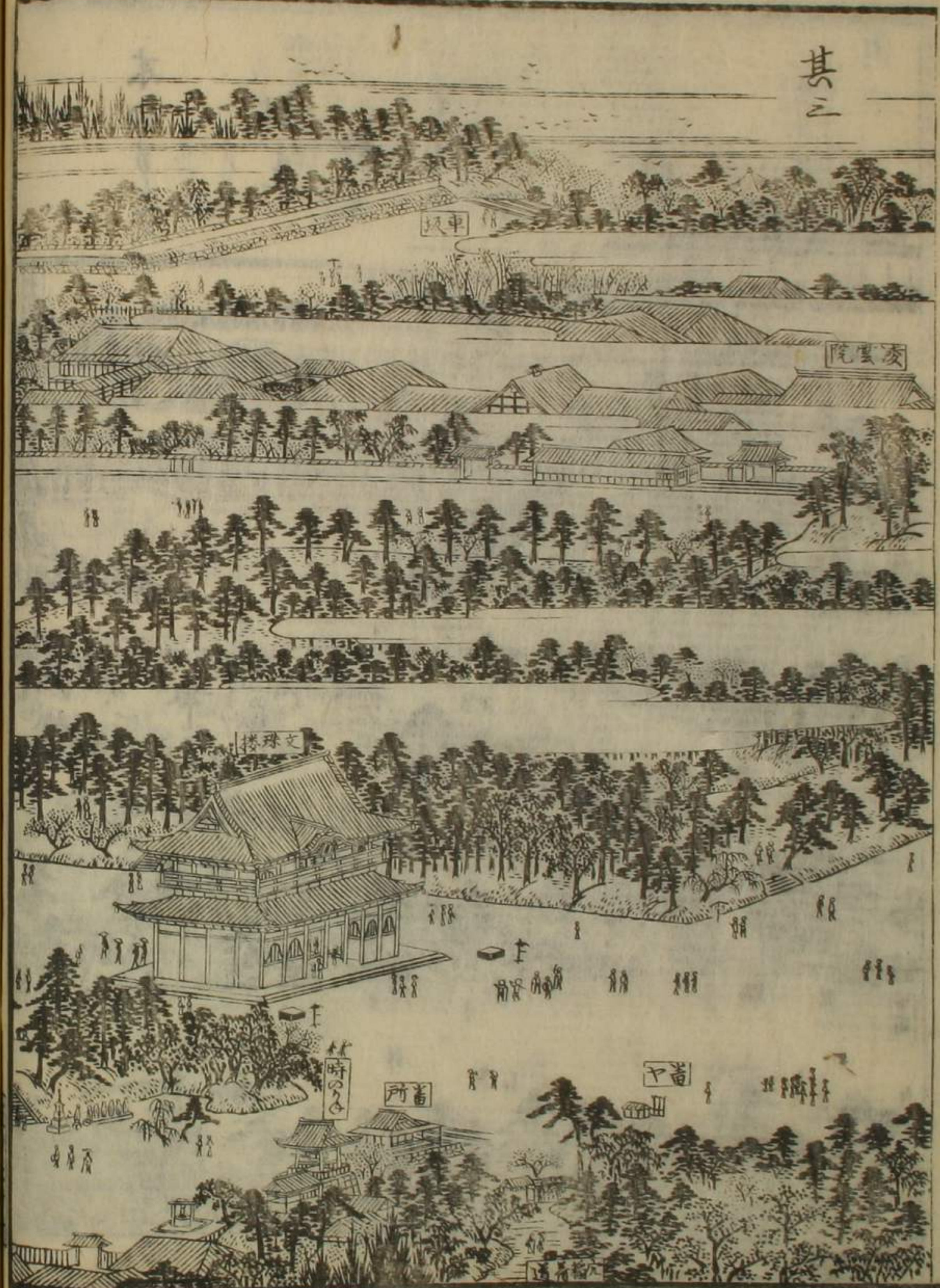
其二

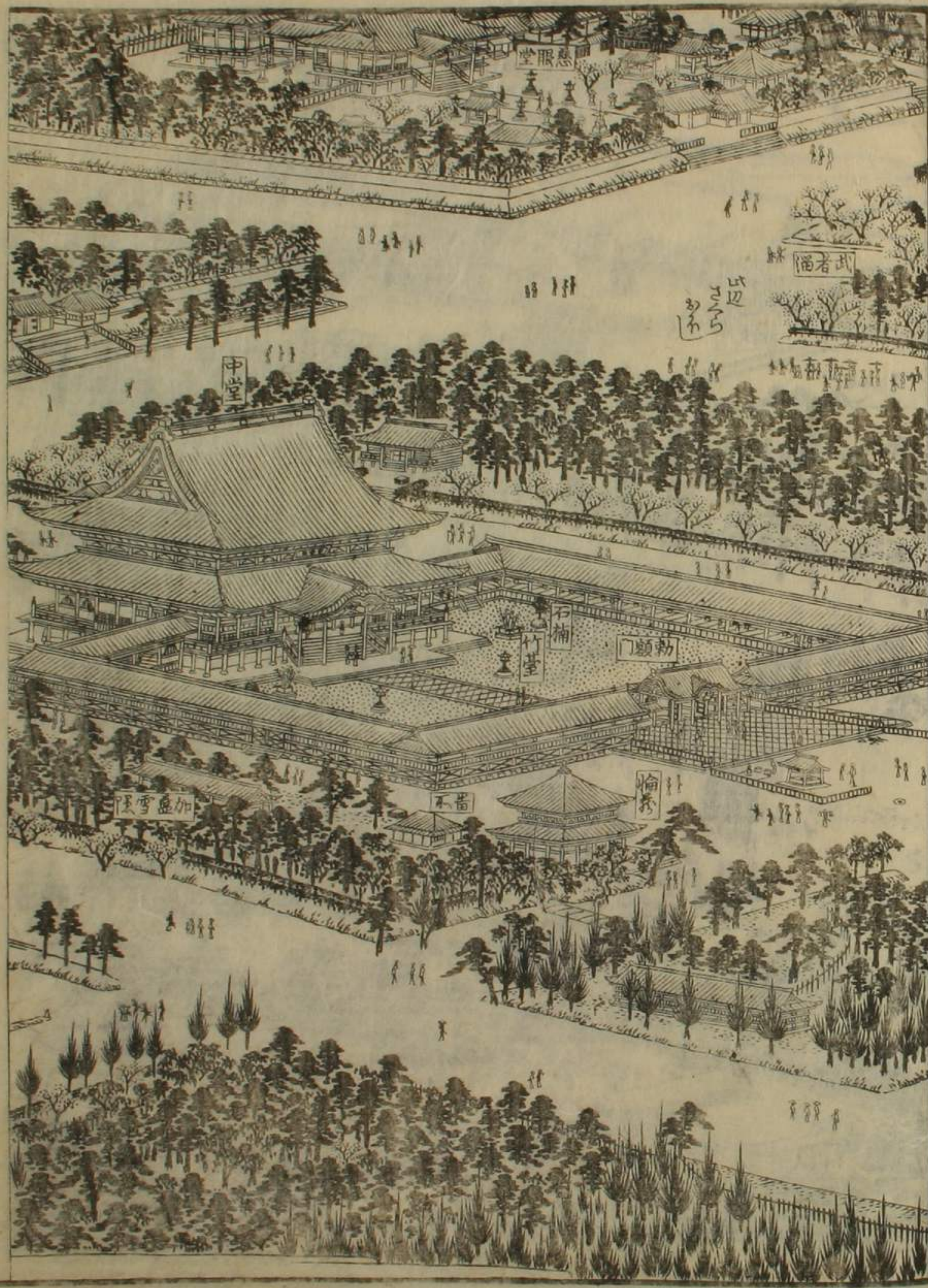
清水観音堂
秋色楊

秋及楊の清水堂の
井の供所構のうら
井のゆきとらふり
花の種すと虎尾
と梅すりの是あり
中浪に所の南戸
作某の女秋及と
いふりの花のころ
さふり井戸の
の梅のふり河の
跡といふ秀か
のり

ふり
なつと
るん









大 東
 一感保相為神塔寶濟卿祖之照告江武
 天應其國奉意謹池々共廟力大神相良東
 之之黃公祝風奉朝各繼大成神相良東
 曙理苟之霜 清同其孝土君攸維獻
 色聲惟寶 霜有日瓦 紺其志之本之原欲一鐘
 喉來夫範新 有日瓦 園心或本之功廟由是伊
 應耳圍鑄 瓦甍猶新 夕亦列舉世屹焉巍然賀羽
 霜往之鳧 猶新如 霽建立高皆崇閩國悉敬此在將
 永亦體鐘 如時于 謂宇堂或造設輪藏加時貴廣
 延妙外高 架一樓 盛不日而於成輪加時貴廣
 千謂而一 中樓 事矣於成輪加時貴廣
 之也中樓 似 是利勝建五層 是利勝建五層
 遐長虛顧 自地然 勝建五層 勝建五層
 齡鯨是顧 因地然 勝建五層 勝建五層
 庶吼心此 丹 勝建五層 勝建五層
 幾月之此 丹 勝建五層 勝建五層
 乎早譬丹 忱 勝建五層 勝建五層

鐘樓 鐘樓の鐘は... 鐘樓の鐘は... 鐘樓の鐘は...
 法華堂 法華堂の... 法華堂の... 法華堂の...
 世の... 世の... 世の...
 筆... 筆... 筆...



社 荷 縮 岡 忍

東叡山
勸学寮圖



不預子前人別示本士藏内中盡以親大講聖萬不自武
 壞備其有聽設不院之後奉築諸己近乘院之行皆古州
 而白餘方者一朽僧塔之三徑佛憂黃心了域以是法東
 衆金庖丈知講云衆塚左聖藏祖唯礙行翁此利善中叡
 可一福院三堂東九其右像以之憂開善僧都妙下乘沙
 安千之之聖中西百孝立乃貯大佛法隱行者行使願播
 身二屬四設奉有八枕其明三法乃不老精豈實天願播
 学百悉周教釋文十如戒僧藏乞大興及戒人易人而德
 道兩備有雖迦庫人此師知聖武興於吾律欵以成生於
 無為焉寮少如藏竝藏祝定教武興於吾律欵以成生於
 風遮僧舍異來儒都前髮公其陵於世唐不其論也無故
 雨年都凡而像老料之師得外東而諸失其論也無故
 之脩年二利日二輩西及自叢叡而諸失其論也無故
 遍葺老百人講教感偏二雙以山世知威儀白若上無行
 無之愿間善三及其有親徑銅綬之識儀白若上無行
 饑需後以世教本功僧養益葉勸僧食到為今無行豈苟
 凍是堂栖則之邦績都父古以学俗風處沙東等菩然
 之則宇諸一書書浩石自銅防講而宿叅門都至薩六哉
 憂院朽方矣俾籍大像得像火院不露方便勸真度莫
 身既壞学其國又以乃居也患正能不嘗發学至度莫

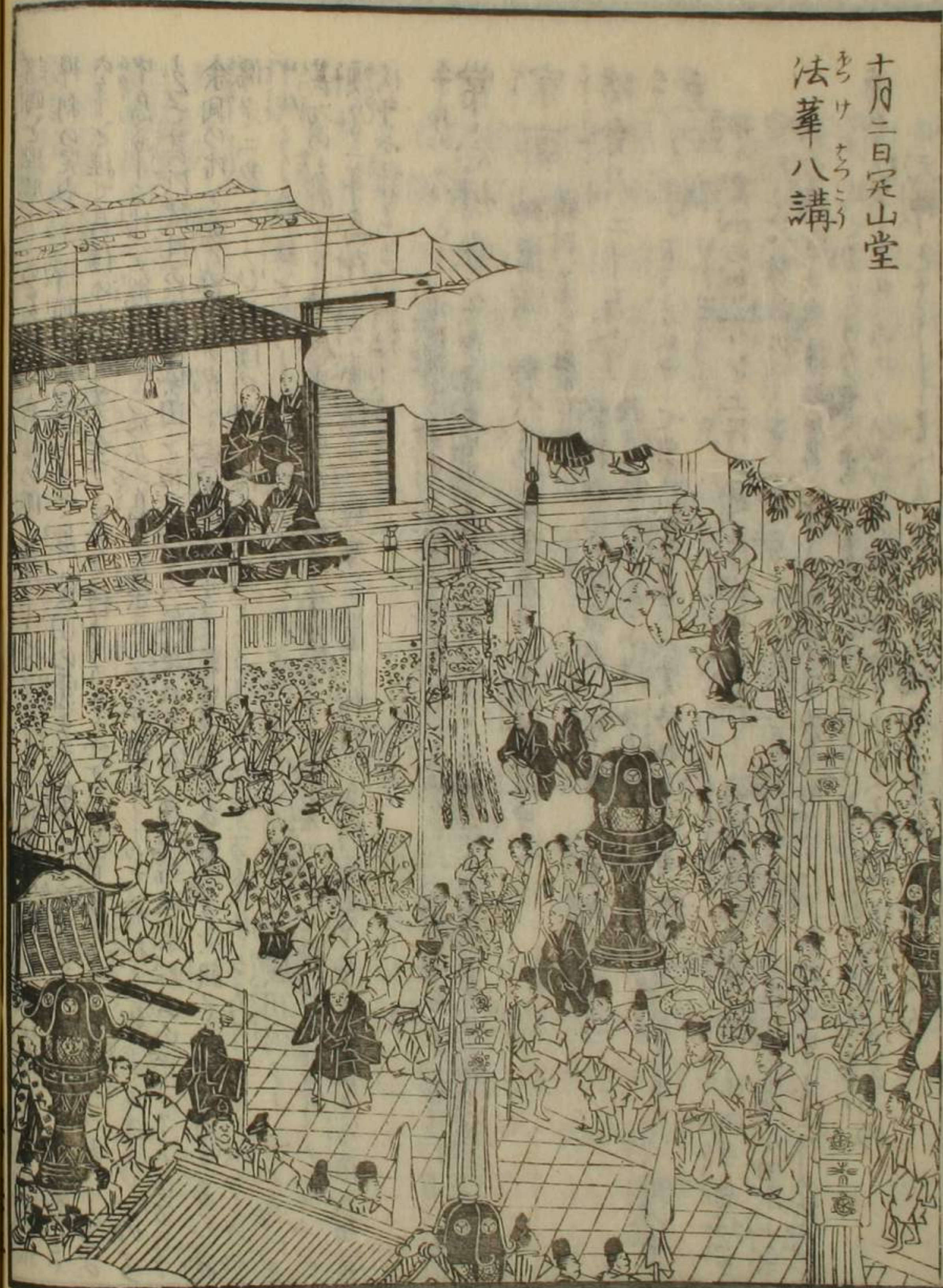
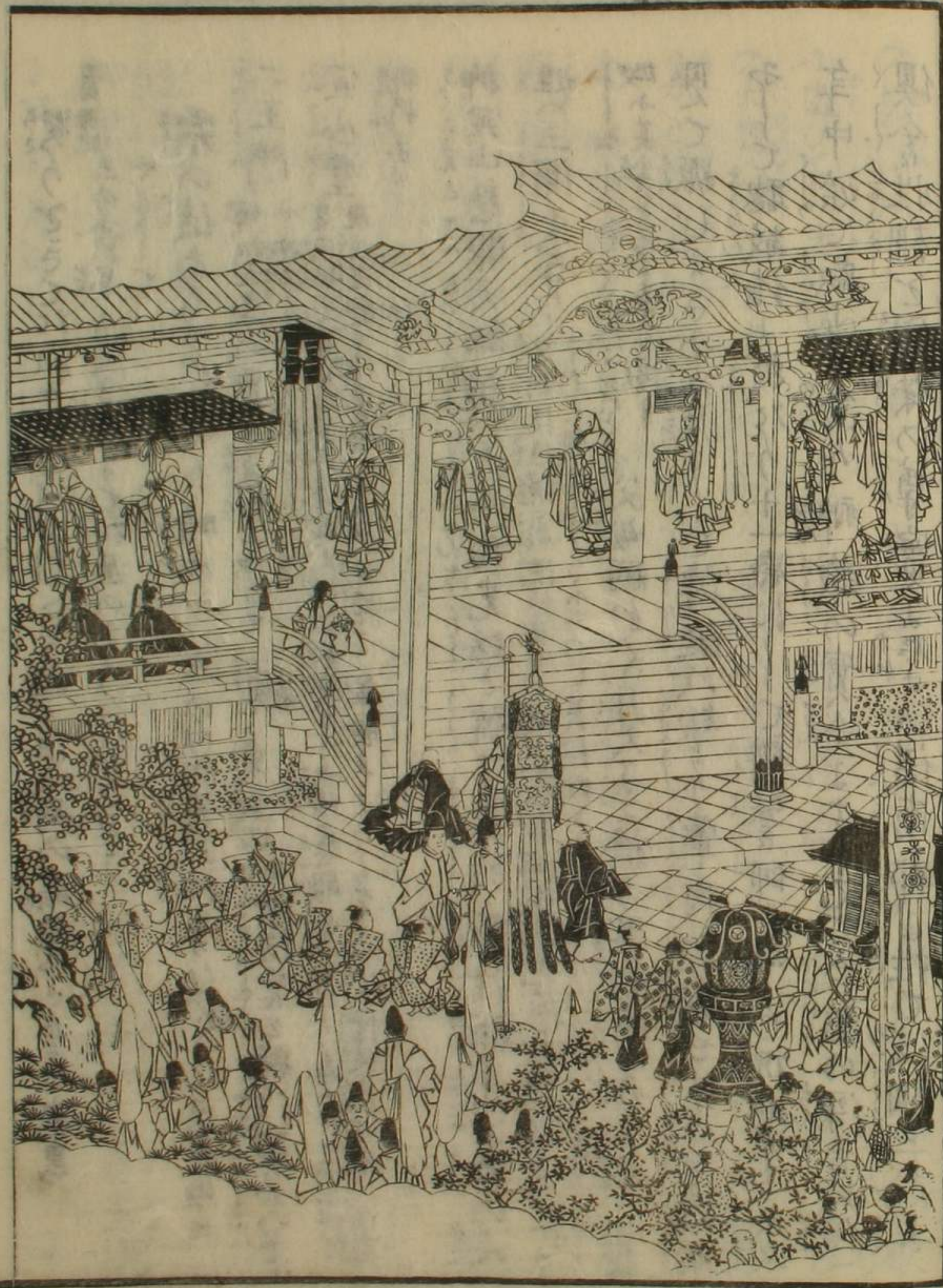
三聖人の古銅像と劫も屋上より極底に至るまで悉く河葉と多つて包裏を其四が石
 疊とらんを築き繞らる又極底の後の方にも戒師の石塔と造る傍に佛の石像
 あり同而石壁の外に道徳の碑を建てり又黄檗の泉和尚の石像

安我學成則足俗為世福也於今之為僧也則高田
成則足俗為世福也於今之為僧也則高田
然飄然自出天不聞佛事而臣王侯不捨一得而友高則
矣是則成夫四足不若僧都者重其德嘗於三十三
公大則人所積淨莫不盡其大願國師散施諸名山
載間以春十行藏矣年盡贖為虎關國師散施諸名山
院今至薄每坐山子院住黃所願年師施諸名山
然行奉已藍及因一奉矣旨住黃所願年師施諸名山
飯以則保道船僧都終不致老病交侵予常勤其不加受
非佛講之春嚴世詣東都謝僧恩都到院相訪觀其大意
其講之春嚴世詣東都謝僧恩都到院相訪觀其大意
之大立院今至薄每坐山子院住黃所願年師施諸名山
元行勸後賢云所罕有僧恩都到院相訪觀其大意

勸學坊了翁僧都 其俗性冷木氏羽尾勝郡八幡村の産あり寛永七年庚子三月十八日
龍泉禪寺入てぬ僕とありつゆのふ新嶺自得居士のむくふよりて難保一僧とありぬ
そん一切極徑心來の肝膽を天の眼目よりみたりとて一代藏經と建立せんと
りて保元年中申置信守信備宮小僧一人心志願の成就と行りたるより

常念佛堂 遺國院の常念佛堂を遺國院の常念佛堂と云ふは春日の他あり寛永の初葉大僧
宗廟 御當家 御代々の 御靈屋あり常山の院中より
坊舎凡二十五宇 拾遺衣衣衣今今洋あり
五の園 下三石石中にて常山の惣名をり八雲伊抄と云ひ奇枕名寄等も武藏の園

此園記の 天神と云ふは... 坊舎凡二十五宇... 五の園... 常念佛堂... 宗廟... 遺國院... 遺國院の常念佛堂... 遺國院の常念佛堂と云ふは春日の他あり寛永の初葉大僧



十月二日 宛山堂
法華八講

契りてきてたれハ其れいゆくさよまのひの國の處のまごりえ 荒惠
田圃雜記
まのひれとてり取まて松原のありけふうけよ

霜の後あらわれまがり時雨とまのひの思れれもうひれ 通貞准后

二王門 明和九年の田圃は焦土となりて 東嶽山 大明院宮に辨法親王三筆

冥心堂 扇岡坂の上あり冥心慈眼大師の影堂あり世俗慈眼堂といひ毎年十月二日

執りあり

柳冥山慈眼大師諱ハ天海南光坊と號す奥列會津郡高田郷の人

姓ハ三浦氏あり 是利法住院義澄の子とも或ハ蘆名修理の支盛高の一族ともいひ

父母嗣れく月天子は禱り其母奇花と香と交

見て振むすさ小九月まゝと降誕は初より葷肉と食せずん奉清朗

ちて聰敏化は然たり十一歳にして辨法師と投して祝髪を天

年中始て嶽山に登り神藏の實全よなとえて台教の深青坊傳

俱舍性相と園珠の尊實よ學ひ復南都に往て法相三論等

の教法以學ひ成重といはるる逢て神道の奥儀を究足利の學校

小遊ひて孔老の書を讀道器といはる小肩擗巖を學ふ後郷に歸り會津

の大寧禪師よあひて教外別傳の旨と發明善慈和尙碧巖

集と徳一百則の話頭と會得ハ其頃甲斐の信玄台教を教ひ

ある時諸師と請して論義せしめ天海と講主とす衆皆辞理の弁れと

感得んといふ是よりして名を朝野とあらふ後常列江戸傳不動院に

住す時小文祿二年其大は早々民られて師として請雨の法を傳

せし其時神女あつて五銚杵と授く師高田浦の深淵に臨むて

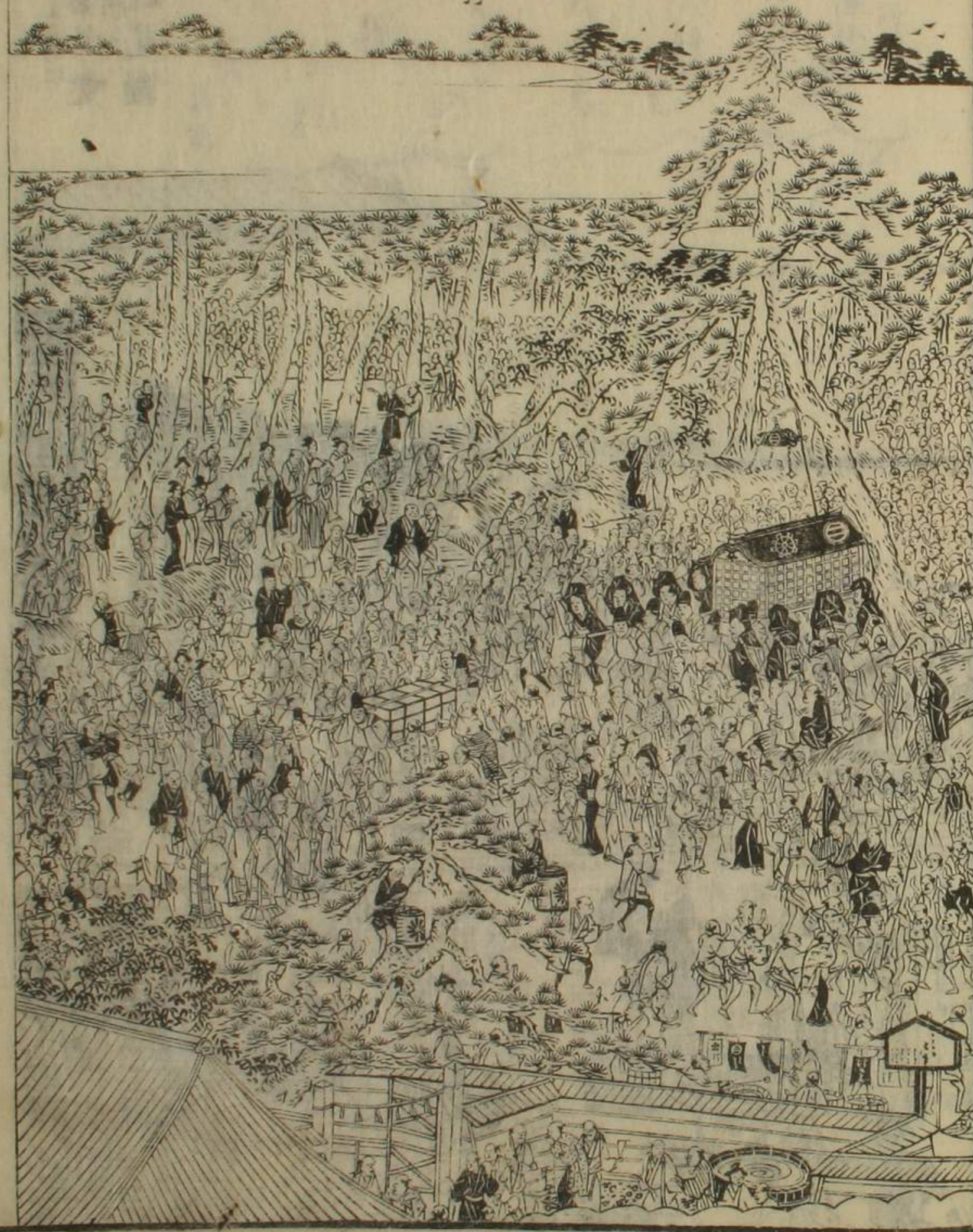
法を傳しあふ膏雨忽注て百穀大に登る 彼五銚杵今猶ほて 又慶長

四年武刃仙波の喜多院に住す同八年下野園長泥の宗光寺に

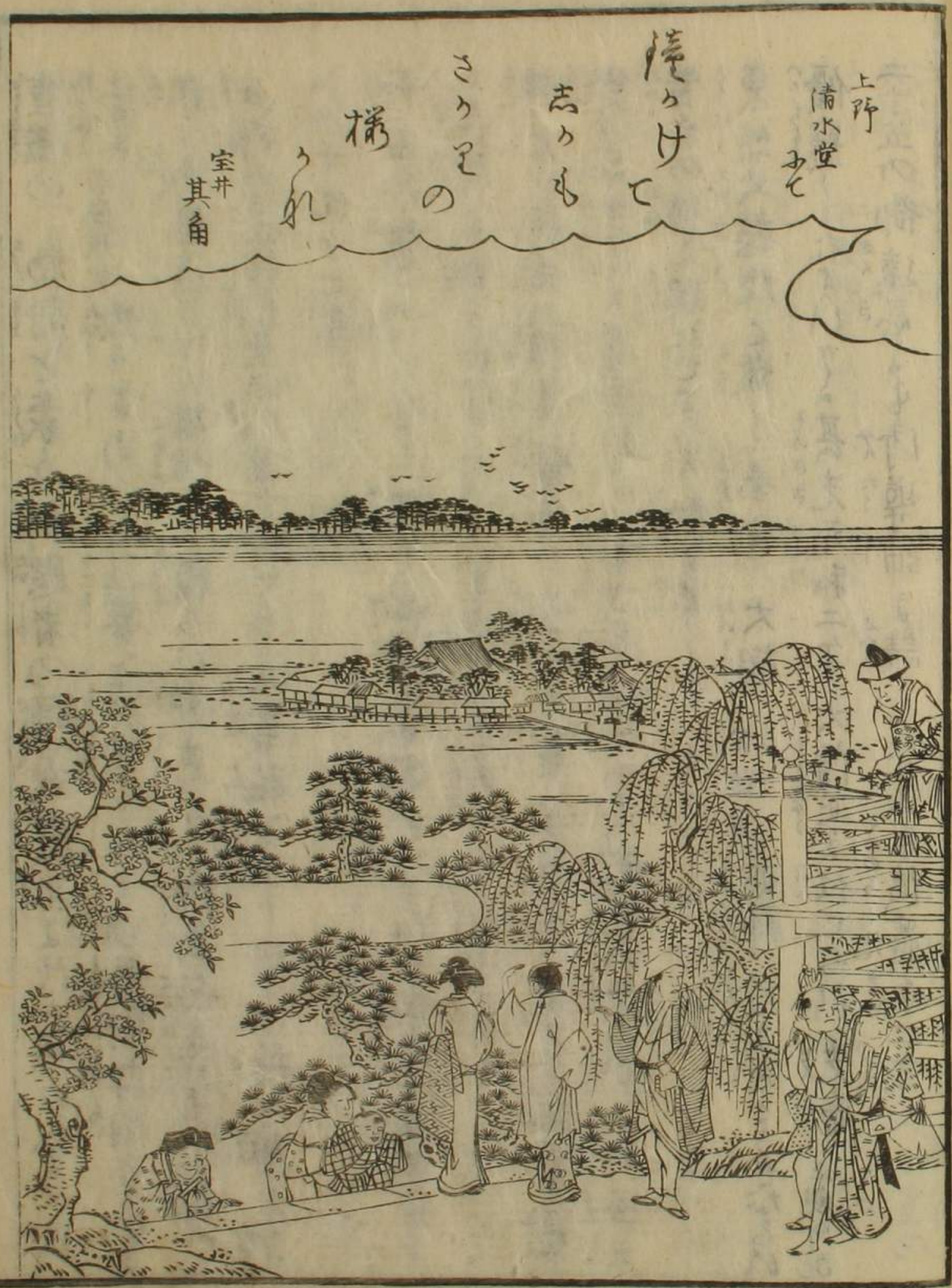
移る同十二年 神君 命して嶽岳の南光坊に住持せしめ再命して喜多院

に歸り居らしむ同十四年山門に登り法華大會を行はる時よ

座遷師大両



月毎の海日ハ西大師の
 行跡を次の如く述べて
 奉らんとして口麻き道の
 者人群衆として道路を
 溢る實に此地熱雨
 の中最も
 首から



上野
 清水堂
 みて
 候け
 て
 志りも
 さりそ
 の
 梯
 うれ
 室井
 其角



清水堂
 花見
 圖

重職の勅許と蒙り新題者の精義嚴重はたとわかれり
上皇 後陽成院 度々召ありて法要を詔問したるは美對詳明なるに
依て歡感後くは権僧正は權られ御まのくは行衣燕尾等を賜ひ
山科の昆沙門堂の門室に附せらるる又震翰を下したるは権を轉して正
小任す同十七年

神君河越は狩したる折くは仙波に立寄せたりて殿堂を後營せり
や莊園と寄させたり同十八年復命を兼りて日光山に居る

神君 薨玄れ後其遺命を奉りて葬せし能山に營り元和三年尊
靈以日光山に遷坐せし奉り是往古の大職冠の例は倣ふ則山王
習合の神に鎮たてたり勅と奉りて

東照大権現と號し奉る 大樹 台徳公 亦神君とせしめたり
優寵したるは其先元和二年大僧正に任せられ 光帝 正親町院
二十五の御遠忌にも侍導師に請ひたり後寛永二年

大樹 大猷公 命して東叡山と闢くは師として厩山とす又上皇の
二宮と 守證親王 日光山の清門主と請せしめ師の侍者子に彼は
たす其後上野國新田庄世良田山長樂寺と賜ひ

東照大権現の神祠以下の諸堂と造立あり亦同く二十年の秋
僧正微疾と示す時 大樹 大猷公 とし紀の曲相 頼宣公 篤と
屈し疾と向たり僧正遂に遺語五則と書け 大樹畫工探函に命し

たすひて其頂相と写さしむ一日唯識論と因に忽ち文殊菩薩の來
現と見ると其時至ると志り端座合掌して遷化す時寛永二十年
十月二日を 東國高僧傳に寛永十九年壬午十月二日化寂とあり 紫雲天花の端

あり影堂と當山をひ日光天台の三山に建る當山慈眼堂其あり
慶安元年慈眼大師と謚號の詔勅を下したるは 以上兩大師緣起とよみ事本
慈惠大師 諱ハ良源江の淺井郡の人父ハ本津氏母ハ物部氏あり
延喜十二年壬申九月三日に生る 父母子を偲んで觀音を有りて諱る 十二歳
觀音を偲んで觀音を有りて諱る

正月三日
大黒詣



毎歳正月三日八都下の
諸人東叡山護國院の
大黒天(まぐろ)此作影入
存(まぐろ)華(まぐろ)
世(まぐろ)靈(まぐろ)著(まぐろ)一(まぐろ)此(まぐろ)供(まぐろ)物
の(まぐろ)儀(まぐろ)と(まぐろ)湯(まぐろ)ふ(まぐろ)ひ(まぐろ)た(まぐろ)り
衆(まぐろ)儀(まぐろ)の(まぐろ)華(まぐろ)ふ(まぐろ)ひ(まぐろ)た(まぐろ)り
是(まぐろ)と(まぐろ)心(まぐろ)て(まぐろ)湯(まぐろ)の(まぐろ)儀(まぐろ)と(まぐろ)湯(まぐろ)ふ(まぐろ)ひ(まぐろ)た(まぐろ)り



もして叡山の理仙と師と一同六年は薙染す理仙入寂の後三條
右大臣定方公恩訓律師として大師を受戒せしむ亦尊意僧正
と拜し登壇し早く博學の名を得たり應永三年八月清涼殿に
南北雄才の僧召召て御八講行はせたり時身成佛の相と顯す
康保三年天台の座主と補せられ山勢と領する事とて二十年又
天祿二年四月十五日林九綱戒品を誦終數句を唱ふるに至つてはより
光明と放光といへり天元四年七月大僧正と轉し輦車に宣旨を下し
於永觀三年正月三日弥陀の尊號と唱へて入寂したまふ化壽七十
四條院永延元年其徳の高を仰ぎて謚と賜ふ以上兩大師傳記を以て
慈惠大師 景像 民部法眼筆

慈惠大師 景像

民部法眼筆

の難と説いたまひまより聖徳の備へて船を湖東へ送り頼田井の宿に於て時をたてまつり
後山門再興ありて天正年中彼門前梨の木のつりたる尊影は横川に遷坐するたてまつり
つる今四季講堂に安置したとまつる是外り民部法眼のつりたる尊影は横川に遷坐するたてまつり
ハ列女傳津の西來とといふこととてまつる其後度々山門にありてはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり
うけひくす寛永十七年 大樹 大樹 御令嗣 御誕生の御影のため慈惠大師の
慈惠大師遺言にてはたよく奉山の例にありてはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり
一たてまつるへい又大権の権源にありてはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり
一箇月て執事したてまつる奉とありてはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり
歩を運ひ祈願して成就せしといふとありてはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり
あせり

同除魔 景 或時疫鬼來りて慈惠大師と悩まんとす時に四融三諦と観して
一やんらち夜叉の形相とありてはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり
と金はくをひて懸の來る事とありてはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり
萬民薙屋の扉に至ると今にこれ新像と贈りてはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり
東鑑曰寛元五年丁未三月二日乙卯今日可摺寫
不動並慈惠大師像之由被仰政所之間有其沙汰
同二 十八日辛巳將軍御祈不動尊並慈惠大師
像一 萬體被摺寫之今日有供養之儀導師松法
眼也 信農民部大夫入道行然奉行之 大師と信
權大師言不鳥井榮雅令八遊世の仙とありてはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり
終像摺寫常ふとありてはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり
慈惠大師の尊像と毎月度摺寫してはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり
とありてはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり

同除魔 景

或時疫鬼來りて慈惠大師と悩まんとす時に四融三諦と観して

慈惠大師の尊像と毎月度摺寫してはもとより尊影は横川に遷坐するたてまつり

といのろと多年よりありて今老病をろほそくを了る
あもたてまつるとそおもひつけけりふ

我が身世ふちらん後のまよもいのるふいと母れと思ふ 栄雅

慈眼大師真影 狩野探幽筆

慈眼大師の真影は慈恵大師の影像と共に當山院を領當して二箇月ほど執筆

大慈悲藏 今も南大師の龕のまに安坐す諸人有凶禍福とトは常と指ること

佛祖 統紀曰 大士 籤天竺百籤 越圓通百三十 籤

柳當山の江戸第一の橋花の名勝として一山花はあふくと云ふ

台命よりて和列吉野山の地勢を摸し植うせらるる故ふ花は速

あり遅ありて山上山下盛とらりてり弥生の花蓋より都鄙の老翁貴

とれく賤とれく日毎み袖と連てては群遊し花のそわみ尺寸の地を

争ふて帷幕以張筵席と設く詩歌管絃ハ鶯聲み和し錦衣繡裳ハ

花影は映し愛及賞吟日の暮とあらん 慈雲山瑞林寺 上野清水門の外武三丁北の方みあり日蓮宗よりて

螢澤

谷中宗林寺の境内
あり又竹林寺の
傍にも螢火と唱か
す此辺螢の光り
依り勝れそり

草花紫と

落る

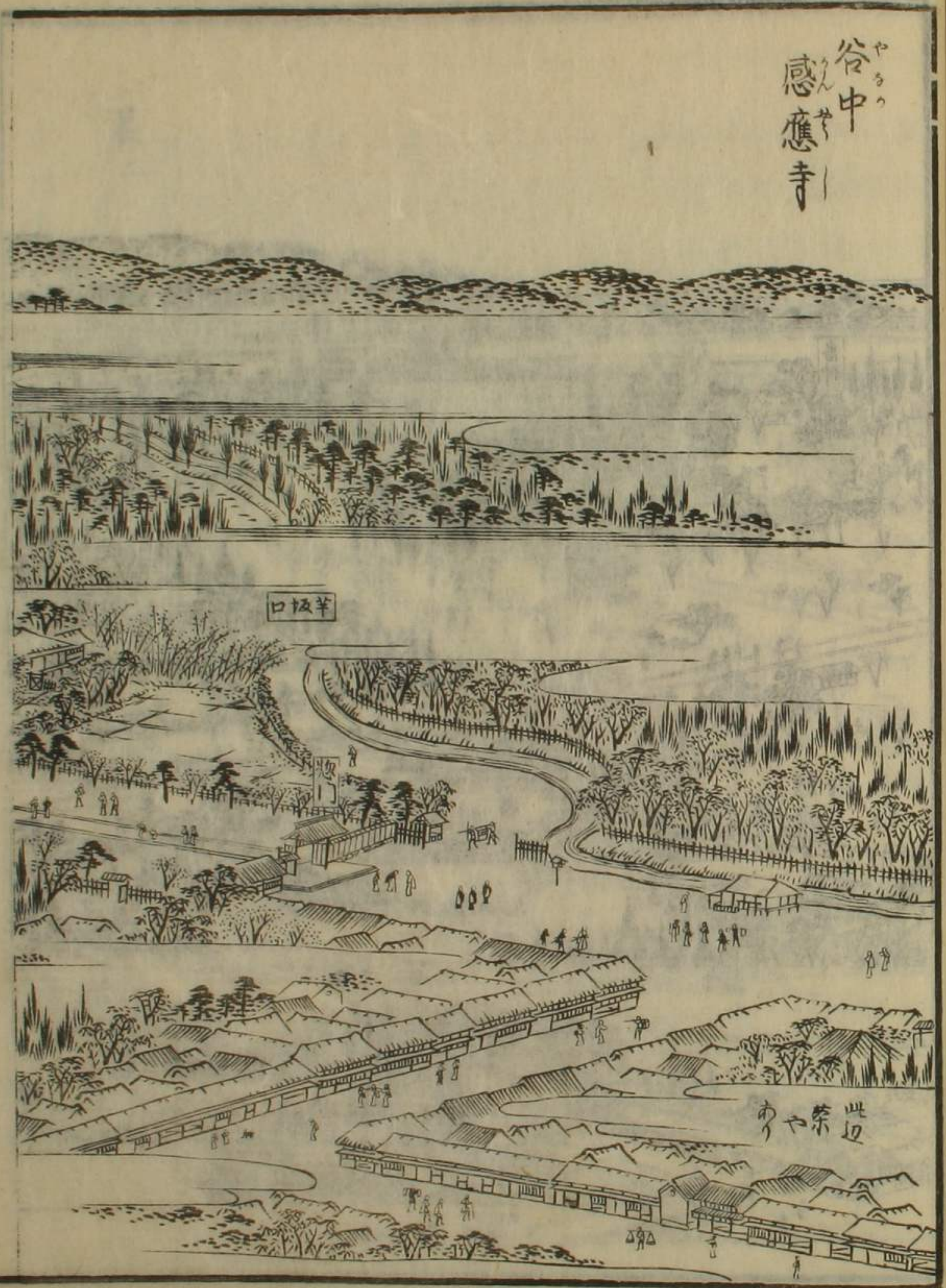
飛

哉

芭蕉

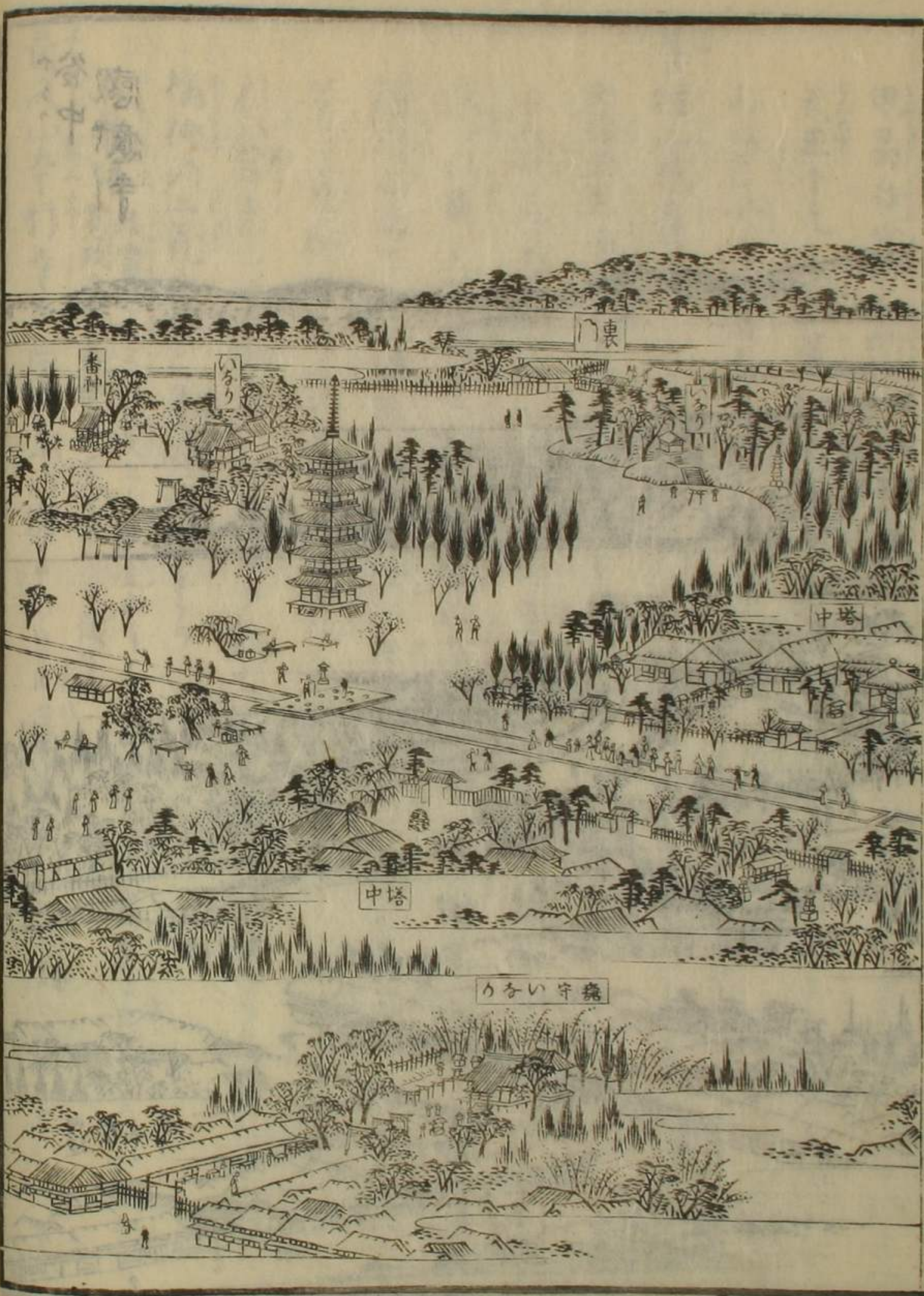
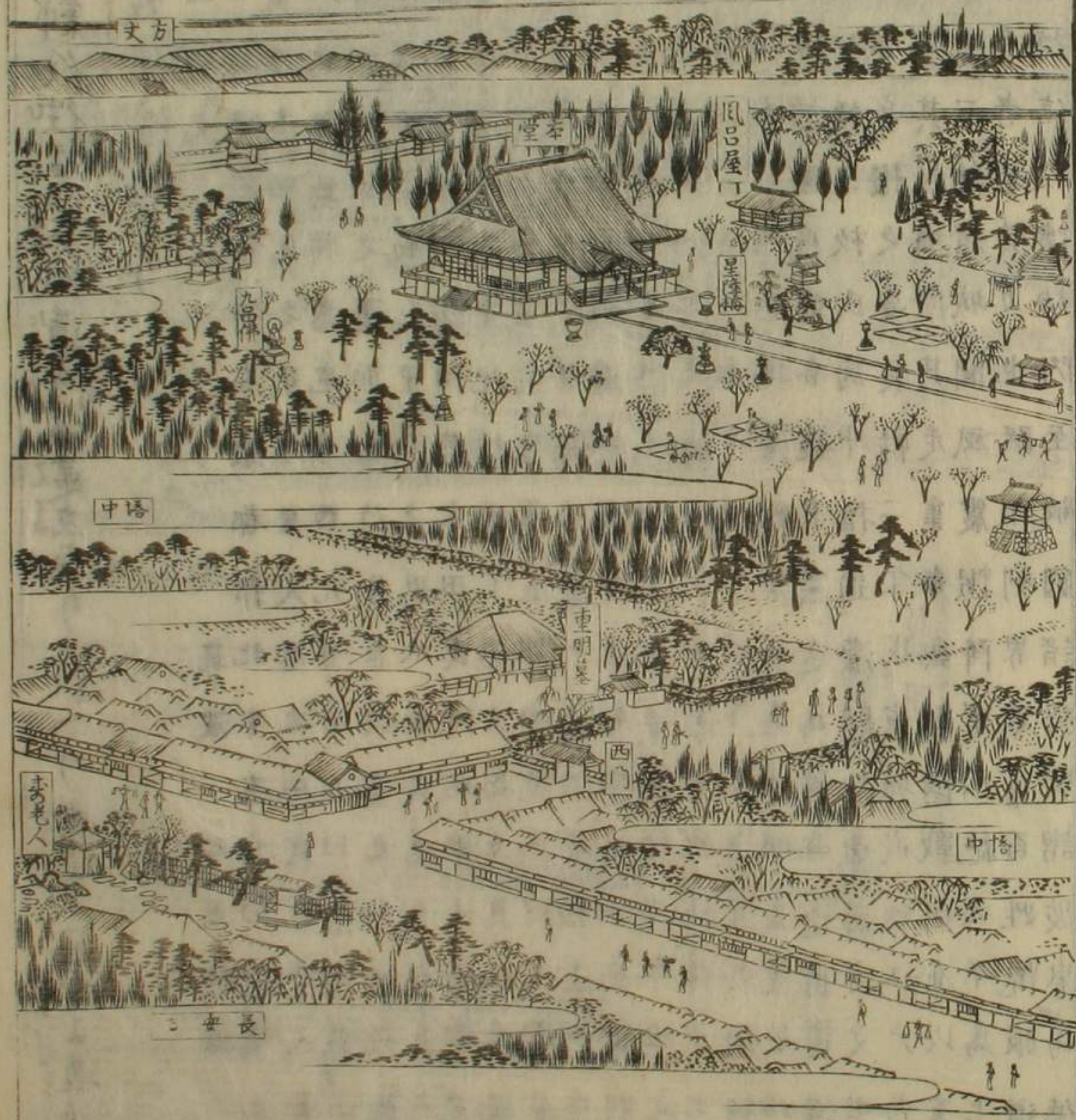


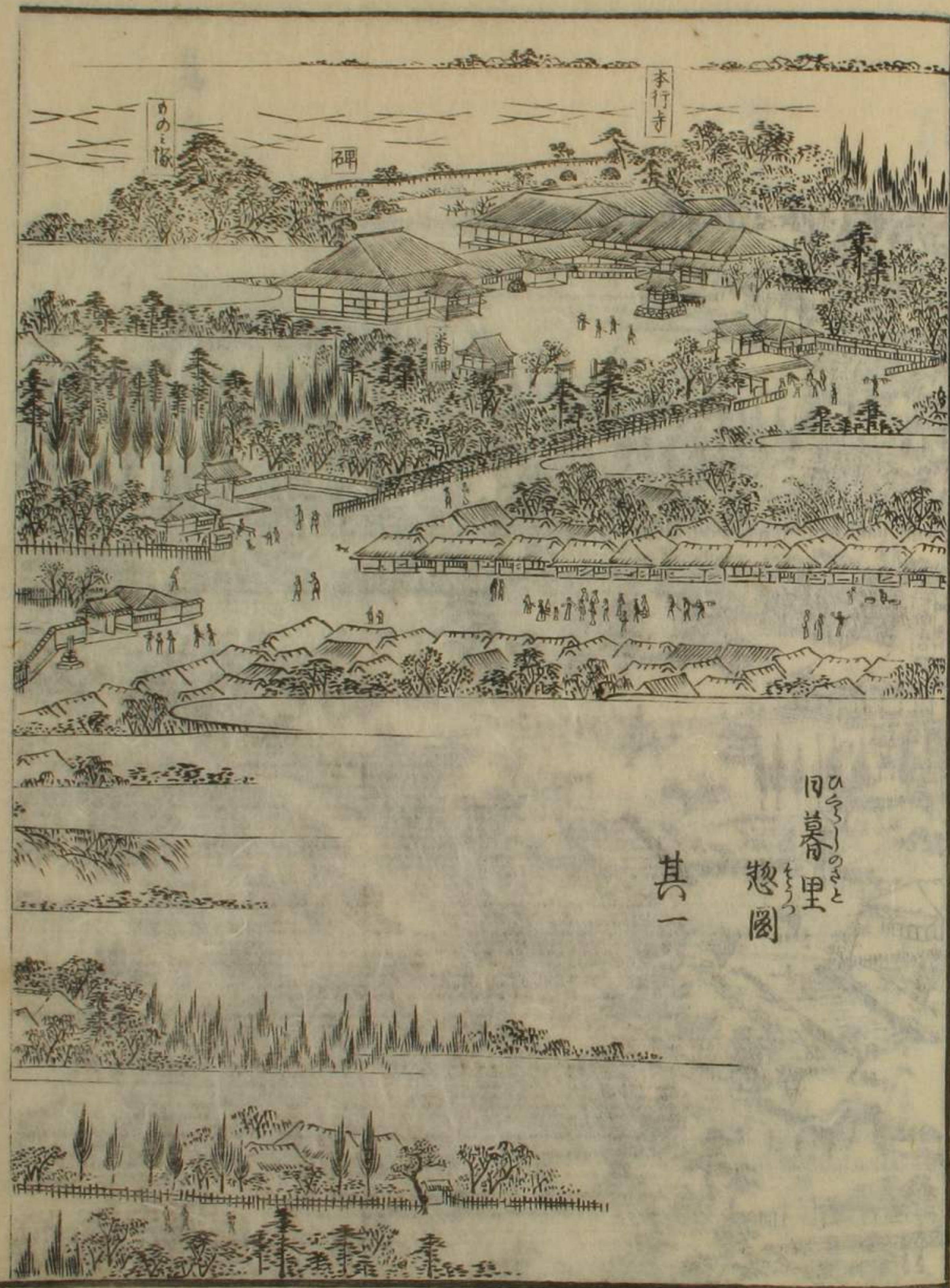
谷中
感應寺



甲品身延山の觸頭江戸三箇寺の一なり元山ハ六十山十七世慈雲院日新上人
 天正十九年れ草創なり奉尊大六の釋迦來ハ延宝五年れ回縁不
 ろひて今侍着しうりと存せり 當寺ニ安並る日蓮大士の像ハびり同不舎中
 長耀山感應寺 上野谷中門の外ニあり天台宗ニて奉尊ハ傳教大師
 の作の毘沙門天と安置ハ當寺始ハ日蓮宗ニて宗祖上人と元山と日長
 上人中貞ありてゆ々浦一宗の寺院たり元禄年中故ありて台宗に
 改られ爾より後東叡山ニ属ハ其時大明院宮の清願よりて叡山
 横川小あり傳教大師の作の毘沙門天の像とこみ移奉尊と
 せらる京師鞍馬山の毘沙門堂ハ比叡の乾久當りて佛法守護の道場を
 れハ當寺も東叡山の乾久當と以て鞍馬寺ニ比せらるといり境内
 桜桃の二花ありて春時燦爛をり
 五層塔始當寺中貞日長上人建立ありり明和九年の火災ニ焦土とされり仍て
 寛政の今再建してびり後せり
 長久山奉行寺 同取小の通ニあり日蓮宗ニて元山ハ日玄上人六永

其二

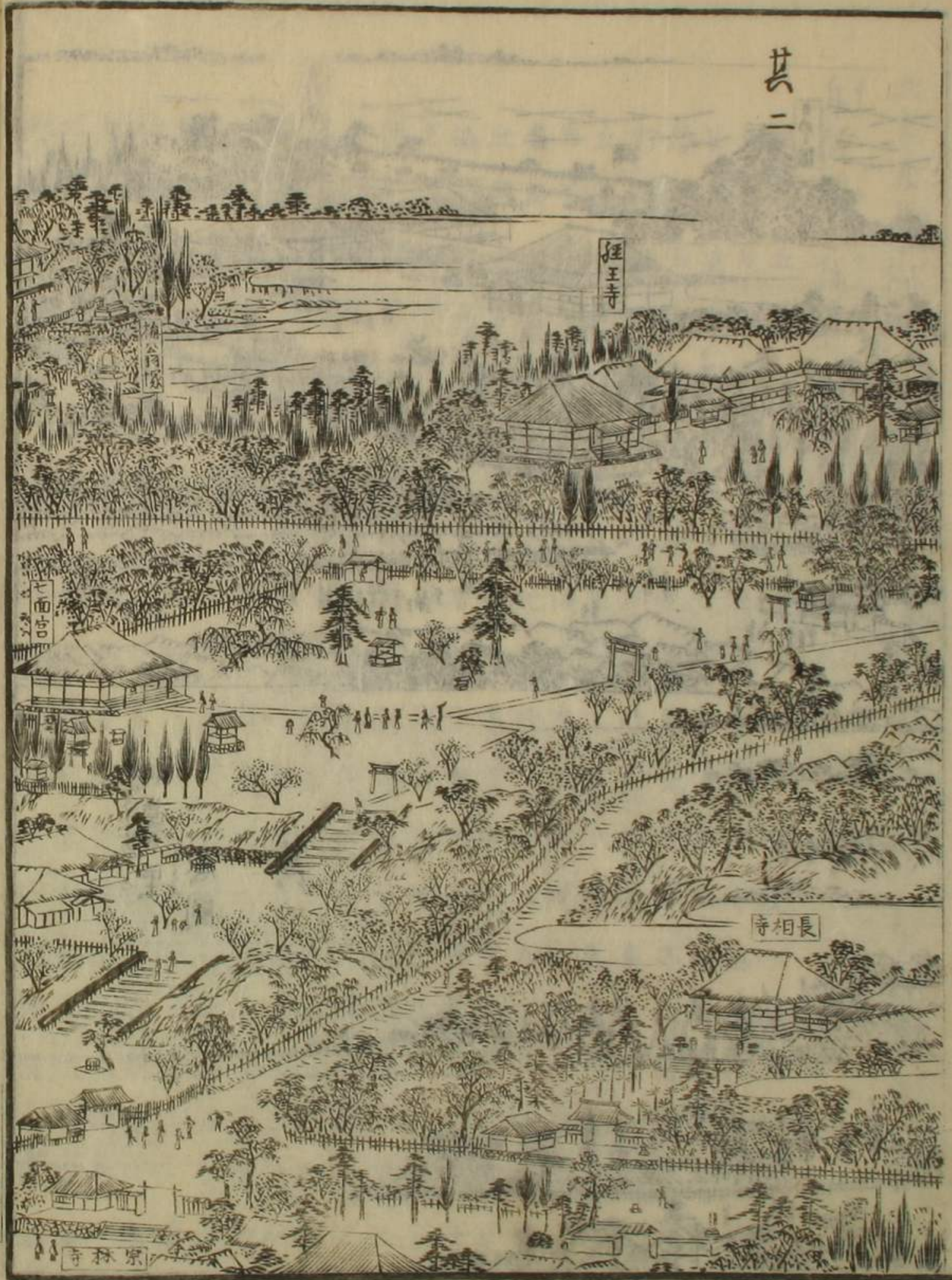
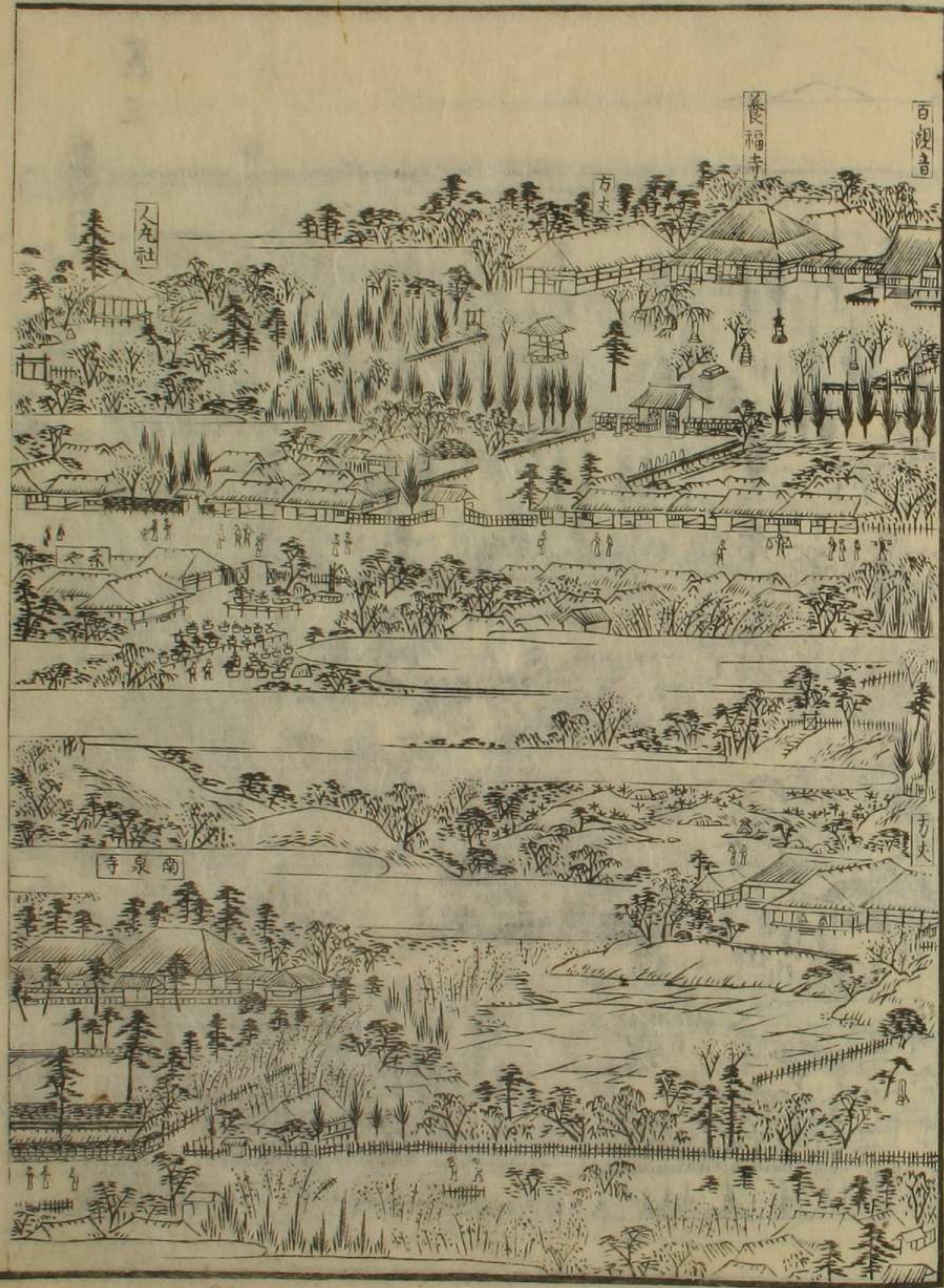




日暮里 惣圖 其一

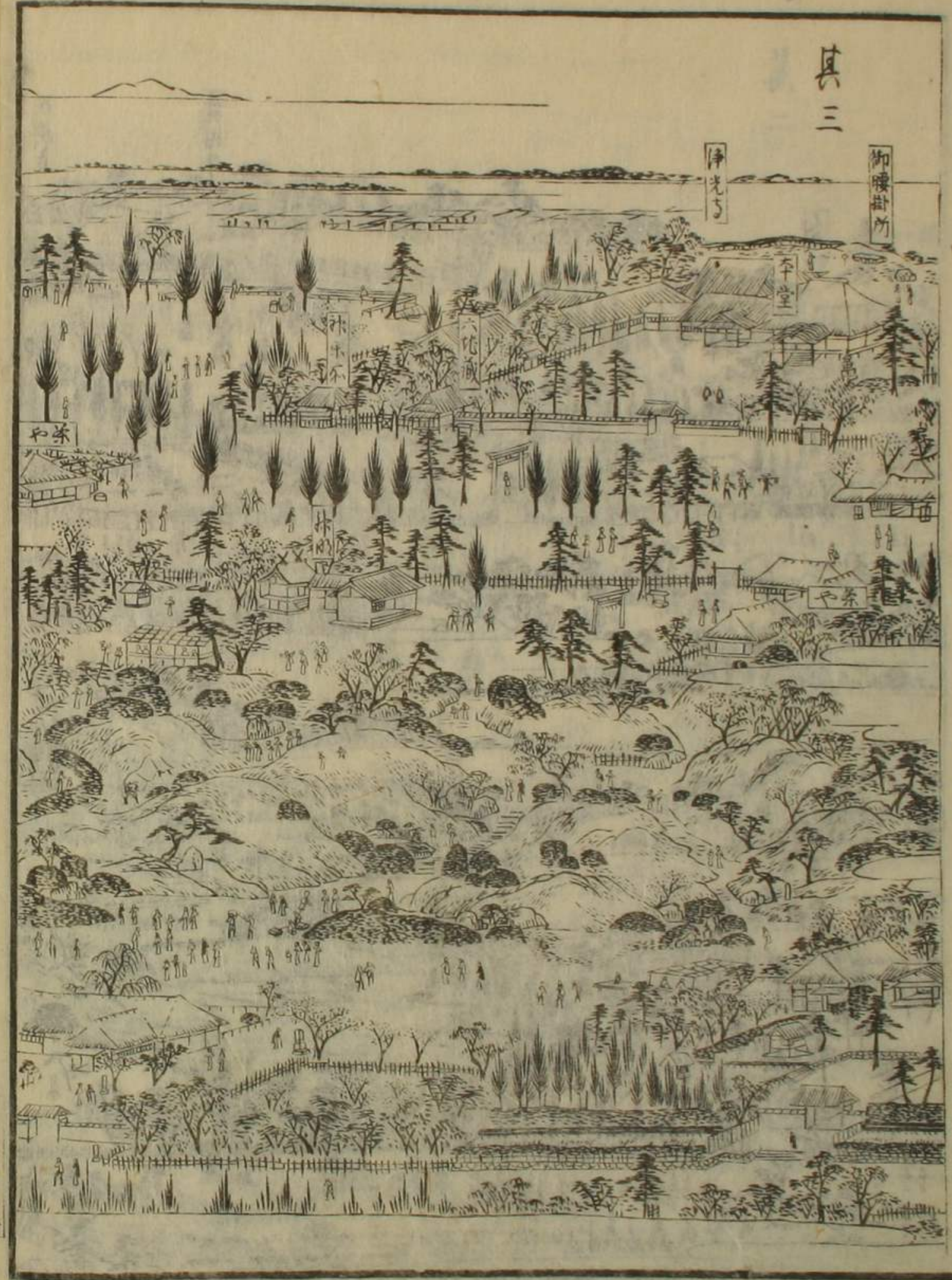
灌杖勝而之二天扇孫名得其攝丘盡百丘則思奚里道
 增氏衆鎮材世下谷父持斯祀之與爲有唯太太名曰灌
 脩之兩之專屬戰少道資丘也所山木餘址田田灌暮
 德有毛正季管爭恢真官蓋寺在皆泰年耳氏氏無太寺文
 信者二其兵領諸廓名左不與而用閔于有保無忘田本
 以皆總封撥上國有資衛幾群道其壘令之郭之其惠之行
 懷其諸壇之秋瓜大清門得屏灌號壞矣叔自遺而也號在
 初力城險要氏裂志以大矣攝之名臺相傳里在寺半東
 附也聞其長府各博永夫可遷曾矣圯傳昔人丘寺里都
 至既風走祿中據漫亨道不於孫寺彷彿人丘寺里都
 敵而震集二推其經四灌謂斯今舊復太之乃西里郭
 國列閉每道黨史年其奇里懸在不田思其北人郭
 諸界降與戊灌迭善士疏也者河谷忍氏太亦山太寺波
 將寧者鄰寅贍爲兵子源替緣炭中去既田候山亦田有
 皆肅不國城智脣汰生光諸室世太丘里也之曰氏也
 謂百絕戰武豪齒明道祿譜永世相田其人自址道也
 彼姓大利列邁道盡灌賴牒中相田其址過有也灌里道
 專悅半在江有文道是相十田遷以羣焉其丘故墟二無山奚丘
 爲服爲以武灌時列世氏則守屐故墟二無山奚丘
 德道上寡焉武灌時列世氏則守屐故墟二無山奚丘

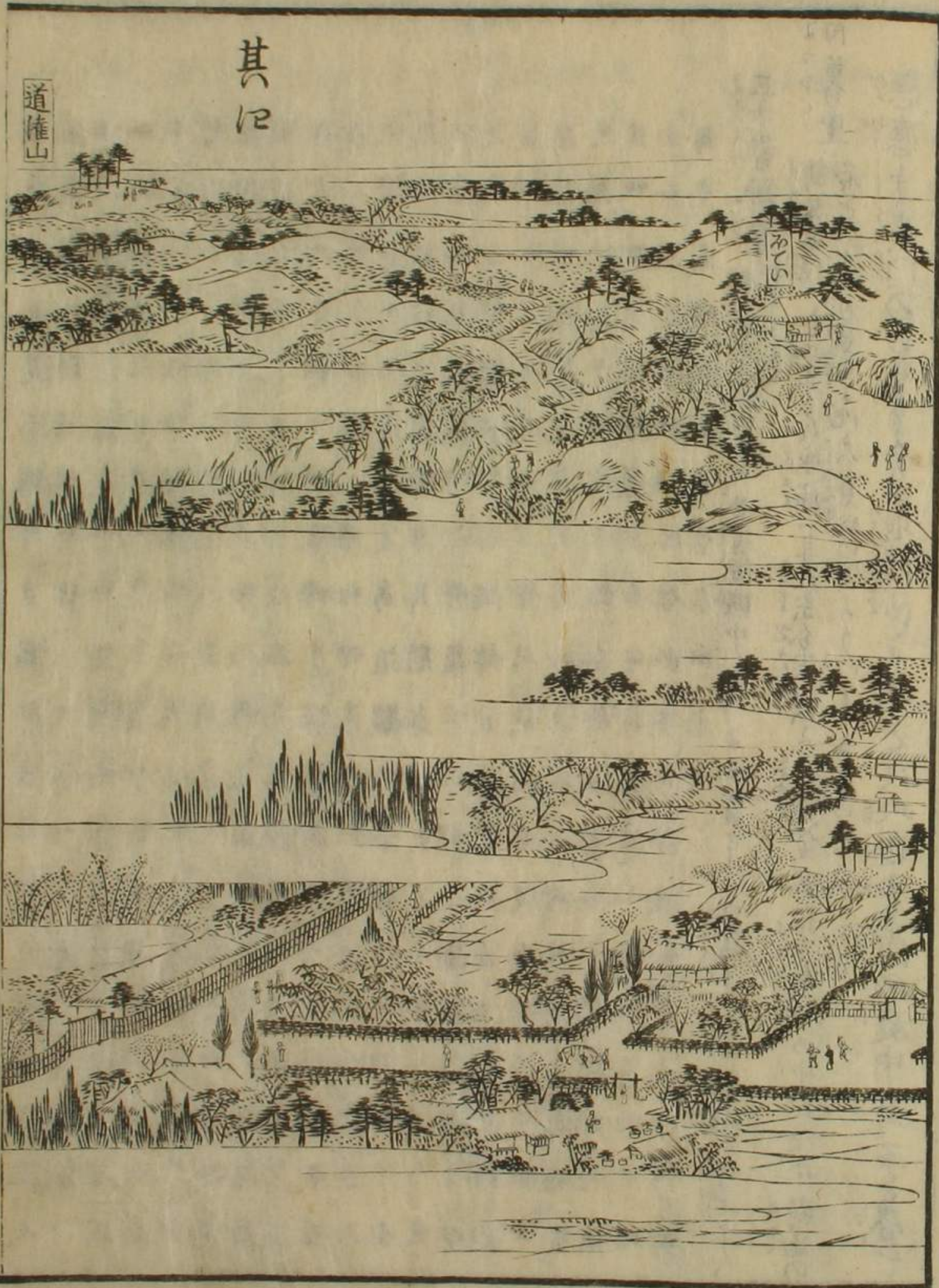
六年及草創以往古八右田道灌の建立るりといへり當寺庭中道灌
 年候塚と稱するものあり



其二

五ノ四下





其江

道権山



日光山

舟倉

観音

青雲

観性院

我專爲暴是不戰而自服也寬正中道灌入京王一人
米道以褒揚之造國風今御世所傳其英武又者可
知也四宮成煥圖樹石于丘上與懸河大夫古屋
昔何至斯里之及武人亦無忌其惠陽百姓以諸不
然也吾聞之羊叔子亦無忘子襄其碑資靡不墮波
世之所建廟立碑歲時享祀望其顯公又四世十
灌公者異於此碑國初時顯公又四世十
之封食邑五萬石定國道盛矣顯公又四世十
以歲時朝東則春其肅有群方今登斯大
白羽若觀當其日齊禱司整戎馬遂登旗纛
發揚躍用兵乃皆延頌司銳待各慎其守燧者
焉爾於是乎君大夫慨然念爾祖俸厥德將慎
其四竟其子孫無亦司以義施小民以惠而光其
令名以碑其丘焉皆由也夫然知里人其址
馬寺主碑其丘焉皆由也夫然知里人其址
三十番神堂 教堂のありてあり 昔道灌城中平川又安置せし靈像よりて冥眼自蓮上人
日暮里 新修の他とて心字とん永保二年北条分限帳より遠山弥九郎仁戸知行の中に屋中新修の
感應寺裏門のありてあり 道灌山と界とん此辺寺院の庭中奇石と覺て

假山と設けり時草本の花は常に遊観し供中二月の羊よりの酒
亭茶店の攪乱せし貴袂をばして暮の日の永を覺れ此里の
名ありてありてあり

七面大明神社 同不延命院といふ日蓮宗の寺に安置す矣山日長上人萬治

三年庚子正月十六日夢中靈告を得て後勸請すとあり

補陀山養福寺 觀王院と號す同不北の方あり奉尊の三尊の彌陀佛矣山の

本食義高上人あり 傳の前の田満寺の条にあり

觀音堂 西國坂東扶文百番の奉尊如意輪觀音 佛工春日の作すく西國札不茅一番

十面觀音 相傳の傳すくは東札不茅一番 正觀音 佛工春日の作すく西國札不茅一番

抑此百觀世音の義高上人の建立れり上人初高野山の高臺院に住職

たすく後彼寺を退去し當此に越さ百番の札取を摸さし事を

企川是奉土且至りて死見女等の結縁の爲とあり後て此地より

小庵のありり々々願きて寺と

寄附せられしを奉尊おろく

百眸又えさるを欲きこれを被補

龍竟百眸の尊像をくらひとらん

陸貞御の真蹟あり

諏訪明神社 同取北の方諏訪の臺あり

す其後右田道灌此地を江戸味の出張の若とせ

鎮守とみぢしとを社頭今も杖の本立生茂

あり當社別當の真言宗うて法輪山浄光寺と号

高崖又架して眼やみ千歩の田園と見やせり

四時の眺をならすと云事あり中も雪のあり

して雪見寺とも号とらや

人麻呂祠 菅原道元公の御影あり

比藏堂 建ありて元禄四年小堀眼供養

浄居山青雲禪寺 同町小あり妙心寺流の禪宗

の道場たる昔堀田相刺吏紀正亮候羽列山

光と慕ひ師小就て法を需む候 台命と奉

移すの頂彼地小庵と結ひ師をて焚座せ

より 藤井山浄居寺とある 頼廢の寺院を引

す 伯渡和尚宝曆七年相の藤倉建長

其後融君正順候香花料として北總の佐倉

境内富士浅間宮秋葉金比羅辨財天護國稻

道灌の勸請ありとら

船繫系松 青雲寺の境内涯小臨

二株ありしが一株は往安永元年の秋大風

吹折て今一本のみ

存



ほろりふ小

す

さ

つ

れ

其角



道灌山徳虫

文月の末とせ中
 小してとり
 名みいあ虫塚
 の辺を奇後とす
 河人吟客に
 未て終夜その
 情聲と跡重す
 中も童児の言
 肺腑を
 滋養粉娘の
 あつせり
 金琵琶の振持
 くくくわの
 有明の月と
 杉如くも
 一真と平
 いまん

残まろ此樹蔭より眺望の荒川の流る白布を引くこく筑
 波黒髪ハカの山ヤマの畫エ小似たり豊島の村落の眼メ小ありて耕ヒ畑
 う川賤シの葉ハすこ一金カネ小入利根川の遠帆緑樹のうけに見えかれ
 此れコノ白鷺ハクの飛トこ此地の風を画中カにあるル如ニ
我人云く往昔此麓ハ豊島川小狭入江と道灌の岩球あり一頃ハ茶製共外まつ運送
 の松よりこの松を同堂小せりのまをほくといゆもあちち松茶とむらの義人のゆゑに
 の御よりくはちとといふ目的小す林のく小同いふとよて道灌山の松と唱ふとを
 道灌山 一名を珠山ともいふ南の新堀を隈サ小ハ平塚小接す往
 右左田道灌江戸城小あり一頃出張の岩城とせ一跡ありとも
 又岡道観坊とのふる者の茅宅の地ありとも云傳ふ道観坊より後藤髪
 長耀といふ
ての観坊と踏らとと岩中感齋寺の寢基よりく則此比藥草多く採藥の
感齋寺を長耀山と稱すもあはれゆゑなり
 葦常小こ小本れそ殊小秋の頃ハ松虫鈴虫露小ありて清音
 をあハす依ヨて雅客幽人そ小来り風小詠エイ月小歌カふて其言
 を愛アイせり

